キャプテン・デク / ザ・ロンリー・アベンジャー

minmin

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――さあ、今こそ示せ。誰も傷つけさせないという盾の意思を。命を賭してヒーローであった、鉄の遺志を。

ＭＣＵ世界に移動してしまったデク君がエンドゲーム後に帰ってきたお話。

気が向いたら更新します。あと世界と時系列が物凄く前後する予定です。

要するに頭の中の妄想を書きだしただけです。ご指摘によると

『評価バーは赤くても稚拙さと陳腐さが際立った部分が多い』らしいので

苦手な方はそっとブラウザバックをどうぞ。

目次

キャプテン・デク／ホーム・カミング　1
エンドゲーム1　6
雄英高校入試　15
エンドゲーム2　22
個性把握テスト1　31
シビル・ウォー／キャプテン・デク・オリジン　38
個性把握テスト2　45
戦闘訓練1　53
戦闘訓練2　60
ブラックパンサー　66
VS．オールマイト　73
責任　80
キャプテン・デク　87
マルチバース　95
敵襲撃1　103
敵襲撃2　111
敵襲撃3　120
インタビュー・ウィズ・キャプテン・デク　131
敵襲撃4　138
What is hero?　146
インフィニティ・ウォー0　155
雄英体育祭1

キャプテン・デク　／　ホーム・カミング
エンドゲーム1

最初に感じたのは、痛み。

思考するより先に自分の身体を隅々まで確認する。動かせない部位はないか。痛み。動かすとまずい部位は。全身が恐らく打撲で痛むけれども、動ける。

飛び起きて周囲を確認する。瓦礫の山、山、山。取り敢えず危険はない。そこでようやく記憶が戻ってきた。轟音、衝撃。そして崩壊。よくこの瓦礫の山に潰されなかったものだ。

「……また貴方に命を救われました、陛下」

言いながら左腕に取り付けていた盾を撫でる。青、赤、白の3色で彩られた、オールマイトのコスチュームを意識した盾。どんな衝撃も吸収するというヴィブラニウム製の盾。いくら超人的な肉体でも、この盾がなければ死んでいたかもしれない。とはいえ、感慨に耽ってばかりではいられない。

盾を構えつつ基地の残骸をかき分けて進む。周囲は比較的崩壊具合がマシだったよ

うだけど、水漏れが所々に見られる。他の皆は無事だろうか。少しばかり進むと、前方に人影。あの太いシルエットは――

「ソーさん！」

「……デクか」

駆け寄る。大丈夫そうだ。大きな怪我はしていない。ただ、返事はしてくれても振り返りはしない。ずっと前方を睨んだままだ。その視線の、先、には。

「奴の様子は？」

背後から聞きなれた声。僕がやって来た反対側から、スタークさんとキャプテンが歩いてきていた。

「ずっとあのままだ」

「そうか――ああ、君も無事だったかボーイ。盾は？あるな？よーしそれでいい。誰かさんと違って君は優秀だな」

いつも通りの軽口。好まない人もいるけれど、僕にとっては心地良い。安心する。

「……ストーンは何処だ」

「構造から考えると、多分下に落ちていったんじゃないでしょうか。探すのは、骨が折れるかと」

「まだ奴も手にしてないみたいだな」

僕とスタークさんの言葉に頷くキャプテン。その視線は、ソーさんと同じ場所に向けられていて、既に戦闘態勢だ。
「絶対に渡すな」
「きっとこれは罠だ」
「あぁ。――それでも、構わない」
ああ、それでも構わない。3人の言葉が、僕に力をくれる。視線の先にいる敵が、どんなに強力な存在でも関係ない。プルス・ウルトラ。乗り越えないと、このユニバースに未来はない。
「よし。じゃあ意見は一致したってことだな」
ソーさんが両手を掲げる。迸る光、轟く雷鳴。北欧神話に於けるトールそのもの。本物の雷神の力が沸き上がっていく。そして、引き寄せられ両の手に収まる斧とハンマー。
「今度は奴を正しく殺す」

「足りなければ余所から持ってくる。当たり前の話だ」

泰然と瓦礫に掛けて敵が語る。全ての元凶、僕たちアベンジャーズの最大の仇敵（ヴィラン）――サノスが。

「多次元宇宙（マルチバース）――この世界ではない、別の次元の宇宙から資源と食料を調達することで、全ての命を救うことができると思っていた。だが、ストーンの力を以てしても、こちらに引き寄せることができたのは、無力な小僧1人のみだった」

そう言って僕を見る。このサノスは、僕たちが知るサノスとは別のはずだけど。僕の事を聞いているのか、知っているのか。……どちらにせよ、やることに変わりはない。

「ならば次善の策として、世界の半分の命を消すことで、もう半分を救えると思った。だがそれは叶わなかった」

4人でサノスを取り囲むように動く。僕はキャプテンの向かい側。身体に染みついた、いつものフォーメーション。

「過去を知る者が生き残っている限り、新しい世界を受け入れられない者が必ずや存在し、抵抗する」

「ああ。我々は頑固でね」

「ああ、感謝するよ。今やっと、何をすべきかわかった」

スタークさんに白々しい感謝を述べ立ち上がるサノス。傍らに刺してあった両剣に掛けた兜を被る。さあ――来るぞ。ソーさんが両手の武器に雷を纏わせる。アイコン

タクトで、呼吸を合わせる。
「この宇宙を一旦原子レベルまで壊し、ストーンの力で世界を作り直す。そこに生きる命は、失ったことを嘆かず、与えられたものを享受する。感謝に満ちた世界だ」
「その為の犠牲は!?」
キャプテンが吠える。返答は予想通りのものだった。
「誰も知ることはない。お前たちはここで死ぬからな。それに、そこの小僧。お前は例外だからな。残ったのが偶然なのか必然なのか――確かめる術もない以上、特に念入りに殺させてもらおう」
直後、ソーさんが雄叫びと共に駆ける。スタークさんが右手からブレードを出し斬りかかり、キャプテンと僕が合わせて盾を投擲する。
僕の、アヴェンジャーズとしての最終決戦（エンドゲーム）が、始まった。

雄英高校入試

意識が浮上する。

肉体も精神も、休める時に休ませる。例え眠れなくても、目を閉じてゆっくりと呼吸するだけでも効果はある。キャプテンも、バーンズさんも、ティ・チャラ陛下も皆言葉は違えど同じことを教えてくれた。ヒーローっていうよりは軍人の心構えだな、なんて当時は思ったりもしたけれど、冷静に考えると内2人は元職業軍人だった。それに陛下も国王であるまえに戦士、という考えの人だったし。

「居眠りかよ。余裕だなクソナード。あァ？」

かっちゃんが相変わらずヒーロー志望とは思えない形相で僕を睨む。

「余裕、か。まあ筆記試験は悪くなかったと思うよ」

内心は違うことを考えていたけれど、取り敢えずそうかっちゃんに返事をしておく。てめえ最近調子乗ってんなァ……！なんて聞こえるけれど気にしない。

まあ、実際筆記は問題なかったと思う。理、数、英は満点のはずだ。あちらの世界に行ってから、オーバーテクノロジーの塊みたいな国でそれなりに暮らしてたし、シュリ

さんが勉強教えてくれたし。それに、一般的な科学技術もこちらの世界より上だった。主にシールドとかスタークさんの影響で。

ちなみにスタークさんもたまに色々講義をしてくれたけどあまり身についていない。だってあの人、周囲が皆自分と同じレベルの人間だって前提で話す人だし、ついてこれない人は知らないって人だし。それでニヤニヤしながら言うんだ。

『ああすまない。僕としたことが、自分が周囲とは違う天才だってことを忘れていたよ。それで？どこから説明しようか？』

そう、考えていたのはスタークさんのことだ。トニー・スターク。アヴェンジャーズのビッグ・スリー。偉大なるアイアンマン。

人が本当に死ぬのは、人に忘れられた時だ、という言葉がある。そういう意味では、彼があちらの世界で本当に死ぬことはないのかもしれない。けれど、この世界でトニー・スタークという偉大なヒーローを覚えているのは僕だけだ。だから――あれだけ絶望的な戦いであっても、彼のことを、顔を、言葉を、振る舞いを。ハッキリ思い出せたことが嬉しかったんだ。

感慨に耽りながら、講師であるプロヒーロー、プレゼント・マイクの解説に耳を傾ける。ＡからＧまでの７箇所での模擬市街地演習。演習時間は１０分。短いな。というか高校なのにどれだけ土地持ってるんだ雄英。

「受験番号連番なのに演習会場が別だね。同じ学校の生徒同士で協力させないためかな」
「チッ、てめェを潰せねえじゃねえか。つーか見んな殺すぞ」
「……前から思ってたけど、ヒーロー志望として潰すとか殺すとかはどうなの？かっちゃん」
　解説は続く。仮想敵、ポイント制。行動不能ってことは、身動き取れなくするだけでいいのかな。まあそうしないと戦闘に適した個性しか合格できなくなる。救助や支援に特化した個性だってあるだろうし。うん？仮想敵を3種多数配置？
「質問よろしいでしょうか!?プリントには4種の敵が～～」
　と思ってたら如何にも真面目そうな眼鏡君が質問してくれた……って縮れ毛の君って僕のこと？
「先程からボソボソと……気が散る!!物見遊山のつもりなら即刻雄英から去りたまえ！」
　物見遊山、か。まあ他の受験者より若干意識が低いのは否定はしない。折角だから環境の良い所がいいからと受験したけど、別に雄英じゃないとヒーローになれないわけじゃない。それにそもそも、ヒーローは授業を受けてなるものでも、免許、資格を取得してなるものでもない。僕はそう思っている。そういう意味では、彼の言うことも間違

いじゃない。けれど――

「ごめん、不快にさせてしまったのなら謝るよ。だから君も笑って許してくれないかな。大分ヒーローらしからぬ顔になってるよ？」

「なっ……!?」

ついつい煽るような言い方になってしまったのは、英語を覚える為に四六時中兎に角会話してたピーターの影響だ、間違いない。とはいえ彼も自覚はあったようで、怒りを沈めて着席してくれた。

『オーケーオーケー、受験番号７１１１君ナイスなお便りサンキューな！４種目の敵は～～』

その後の解説によると、どうやら最後の敵は０ポイントのステージギミック、お邪魔虫のようなものらしい。各会場に１体……嫌な予感がする。こういう予感、よく当たるんだよな僕の場合。

演習会場に移動すると、予想以上の規模の模擬市街地が拡がっていた。どうなってるんだ雄英。本当に高校なの？

周囲を確認しながら身体を解していく。持ち込み自由と言うだけあって、装備だのコ

スチュームだの、個性に合わせた道具を持ち込んでいる人も結構いる。腕が複数あるような異形型の個性の人も。因みにさっきの眼鏡君も同じ会場だった。彼はオーソドックスなスポーツウェアスタイル。腰につけたドリンクホルダーが印象的だ。……マラソンランナーみたいだな。

アヴェンジャーズのコスチュームは、家に飾ってある。もう替えが効かないものだからこれ以上傷ませたくなかったし、もう僕はアヴェンジャーズじゃない。という訳で今の僕は作業着をベースに盾を着脱しやすいようアレコレ調整してもらった服を着ている。マスクは付けてない。キャプテンのことは尊敬してるけど、マスクは、うん。

――と、その時。

『ハイスタートー!!どうしたあ!?実践じゃカウントなんざされねえんだよ!!走れ走れぇ!!賽は投げられてんぞ!!?』

プレゼント・マイクの声が会場中に響き渡る。一瞬の後、受験者が一斉に走り出した。なるほど、思ったより実践的ではあるんだな、雄英は。

ほぼ同時にスタートした集団から抜け出したのは、僕と眼鏡君の2人。よく見ると、脚にマフラーのようなものが付いている。どうやら移動補助系の個性みたいだ。トップスピードに到達する前に、前方に1の数字が描かれたロボットを2体発見。丁度左右に位置が離れている。勢いを殺さず飛び上がって――僕と眼鏡君の蹴りが、同時にそれ

ぞれの仮想敵をぶち抜いた。着地して、お互い顔を見合わせて笑う。

「――良い蹴りだ」

「君もね！」

どうやら彼は本当に只の生真面目君だったらしい。僕の方から少し動きを合わせるだけで、何も言わずとも背中をフォローするように動いてくれた。そこからは単純作業だ。現れる仮想敵を千切っては投げ、千切っては投げ。危なそうな受験者を見かけると、たまに盾も投げ。体勢を崩す程度に加減したから、ポイントの横取りにはなってないと思う……多分。

途中で僕が投げた盾に、空中でレーザーが当たって反射したのは驚いた。お臍からレーザーを出した彼も驚いてたみたいだけど、それからは僕を積極的に使いだした。中々良い根性してる人が集まってるな。こちらからも盾を構えて手招きする。その間は、眼鏡君が背中を守ってくれていた。

そんなこんなであっという間に5分弱が経過して。

突如現れた0ポイント敵が、色々と吹き飛ばしてくれました。

「……デカすぎない？全長、ビルを軽く超えてるんだけど……高校入試で使うものじゃ

なくない？」
　いやまあ、リヴァイアサンみたいにチタウリを発射しないだけマシかもしれないけれど。
　一斉に逃げ出す受験者たち。仕方ない。いくら個性持ちとはいえ、中学生程度がどうこうできる相手じゃない。けれど――僕には、見えてしまった。うずくまり、助けを必要とする女の子の姿が。
「君は、逃げないのかい？」
　隣に来た眼鏡君が声を掛けてくる。
「ヒーローだからね。君こそ逃げないの？眼鏡君」
　そう言うと眉間にシワが寄る。わかりやすいな君。
「ぼ……俺は眼鏡君じゃない。飯田天哉って立派な名前があるんだ。次からはそう呼んでくれたまえ」
「そして僕は青山優雅。ヨロシク！」
「……よろしく、飯田君、青山君。僕は緑谷出久」
　突然横から顔を出すレーザー君改青山君。さて、時間がない。あの子を助けないと。
「作戦は？」
「チームワークさ。あのデカブツ相手にはパワーが足りないから、一点集中でいこう。

飯田君、君、助走をつけてから狙った場所にジャンプできるかい？」

「ああ。数センチ単位とまではいかないが」

なら、多少ずれても僕の方で合わせられる。となると。

「青山君。レーザーの射程距離はどうかな？ここからあの仮想敵まで」

「距離は問題ないよ。ただ、1秒以上射出し続けると腹痛で動けなくなるんだけどね」

よし、それなら――

「じゃあ、今から作戦を説明するよ。まず飯田君が――」

即席ヤング・アヴェンジャーズ、結成だ。

不思議な男だ。前方で特徴的なラウンド・シールドを構える緑谷出久という、同い年とは思えない少年を見て思う。最初は不真面目そうに見えたのに。協力するとも、何も言われていないのに、いつの間にか惹き付けられている。きっと青山君も同じような気持ちなんだろう。オレンジジュースを飲みつつそんなことを考える。さあ、行くぞ、飯田天哉。彼の期待に、応えてみせろ。

個性を発動させる。エンジンを燃やす。走り出して――飛び上がる！

緑谷君が下に潜り込み、盾を掲げる。その上に着地すると、次の瞬間、強烈な力で押し上げられた。１７９ｃｍという、大柄な部類の僕の身体が軽々と宙を舞う。凄いパワーだ。Ｎｏ．１ヒーロー、オールマイトには及ばないが、十分強力な増強型の個性だろう。

思考は一瞬。臆しそうになるが、堪えて大型敵の腹部に取り付く。それを確認して、緑谷君の盾が直撃。直ぐ横の装甲が割れた。

「――お。おおおおぉぉっ！」

渾身の力を込めて装甲を引き剥がす。その内部には緑谷君の予想通り、制御を司るであろうコアらしきものがあった。

「青山君！」

同時に、レーザーがコアを破壊する。やはり内部はそこまでの強度ではなかったようだ。これも緑谷君の予想通り。急停止する仮想敵。反動で宙へ投げ出されるが――

「ナイスファイト」

緑谷君が受け止めてくれる。あの高さから落下した人間を生身で受け止めても平然としている。……凄い男だな、君は。

直後に流れる終了のアナウンス。こうして、僕らの入試は終了した。

エンドゲーム2

「――やれ！ソー！」

アイアンマンスーツの背部パーツを展開させたスタークさんの合図の直後、力を溜めていたソーさんがムジョルニアとストームブレイカーを打ち合わせて雷を放出する。雷を司る神のエネルギーを取り込み、人間の科学技術で増幅させたレーザー光線は、サノスでさえ両剣を使って受けに注力せざるを得ない威力を持っていた。

「っっ……はぁ！」

キャプテンと同時に盾を投擲する。直後に疾走。跳ね返った盾をキャッチして、足刈の蹴り。キャプテンは右ストレート。サノスがぐらついた。飛び上がって回し蹴りで光線を受けている武器を狙う――！

「ふんっ！」

のだが、一瞬早くサノスが光線を受けきって弾き飛ばした。蹴り足をそのまま掴んで放り投げられる。地面と水平に数mも飛ばされ瓦礫の山に激突。

「がっ……」

背中を強打した激しい痛みが全身を襲う。意識はある。ハッキリしているけれど、呼吸が整わない。動けない。スタークさんが僕と同じように吹き飛ばされるのを、這いつくばって眺めることしかできなかった。続けざまにソーさんがいく。ストームブレイカーでムジョルニアを打ち飛ばすも防がれた。ストームブレイカーも投擲。躱されて――捕まった。滅多打ちにされている。

焦るな、落ち着け。焦っても状況が良くなることはない。落ち着いて、呼吸を整えろ。そして成せること、成すべきことを成せ。それが戦士の心構えだ。

ティ・チャラ陛下の言葉を思い出す。一刻でも早く走り出せるように回復に努める。ソーさんがストームブレイカーを引き寄せようとしてサノスに奪われた。力で押されている。止めなくては、まだか、まだか。あと少し。

仲間が死に近づくのを見ていることしかできない自分の無力に腹が立つ。悔しいが、キャプテンや僕は超人とは言ってもあくまで人間に過ぎない。人間が人間のまま得られる最高の身体能力を備えてはいるけれども、人間の枠を超えることはできない。端的に言って、サノスを倒すには火力が足りないのだ。だからこそ、戦略の面からしてもこのままソーさんを失うわけにはいかない。

痛む全身に力を込めて立ち上がる。体当たりでもなんでもいい。兎に角止めないと、と走り出したところで――

――雷神の証である槌が、サノスの横っ面を痛打した。

ムジョルニアはそのまま引き寄せられて急後退。まるで昔ながらの武器のように馴染んだ姿で、キャプテンの右手に収まった。

「ハーやっぱりな。持てると思ってた！」

場違いなヤケに明るいソーさんの声が響く。それが気に障ったのか、サノスのパンチでノックアウトされてしまった。

なんだか事情はわからないけどこれは好機だ。ふくよかになったソーさんではなく、キャプテンがムジョルニアの能力を引き出せるなら話は違う。予定を変更して吹き飛ばされた盾を取りに走ると、背後で鈍い音。そして、見なくともハッキリとわかる雷の気配。――いける！

盾を回収して来た道を急いで戻る。戦いを見やると、雷神の槌が巨人の腕から武器を弾き飛ばしたところだった。盾の表が向くようにして、ムジョルニア目掛けて投げつける。僕はあれを持つことはできないだろうけど、これなら。澄んだ音を響かせて盾が槌を跳ね返すと、巨人の背中に直撃する。つんのめったサノスにすかさずキャプテンの膝蹴り。盾の投擲。顔面を直撃して空中に跳ね上がったキャプテンの盾を僕がジャンプしてキャッチして彼に返す。着して自分の盾を回収し、シールドバッシュ。合わせてキャプテンが雷を纏わせたままハンマーを打ち付ける。後頭部へ盾を投げる。キャプ

テンがハンマーで直接打ち返す。
「お、おぉぉぉ！」
　巨人が吠える。追い詰められている――効いている！
「サノスぅぅぅぅっ！」
「あああああぁぁぁぁ！」
　僕たちも吠える。このままスタークさんやソーさん、バナー博士やバートンさんが来るまで持ちこたえる――！

視界が強烈な光で白に染まる

何が、起こった？

「ぐっ……がはっ……」
　気がづけば、キャプテンも僕も吹き飛ばされて地面に倒れ伏していた。サノスに投げ飛ばされた時以上の衝撃。身体が、動かない。かろうじて頭部だけを動かすと、サノスは荒い息を吐きながらも両の足で立っていた。
「……認めよう。お前たちはよくやった」
　ゆっくりと両剣を掲げる巨人。それを合図にして、雲の合間から、地から湧き出てく

るあれは――サノスの、軍勢。

「見下したことを詫びよう。侮ったことを反省しよう。だからこそ――憎しみを持って、お前たちを念入りに捻り潰す」

続々と、いっそ無限にではないかと思える程に増える軍勢。空には宇宙船、それも軍艦らしきものも見える。僕たちは、あれの攻撃にやられたのか。しかし、この、戦力差は……。

「……っ」

キャプテンが、ゆっくりと、立ち上がる。欠けた盾を支えにして、絶望的な戦力差を前に、それでも尚立ち上がる。彼は、ヒーローだから。ヒーローであると、己の魂に誓ったから。――そうだ、何をしている緑谷出久。萎えかけた心と身体にもう一度力を入れる。大丈夫だ、まだ動ける。動けるなら、何度でも立ち上がれ。お前は、ヒーローになるんじゃなかったのか！

――キャップ。

突然、通信が入る。この、声は。

――キャップ、サムだ。聞こえるか？

忘れるはずもない。ファルコン――サムさんの声。

――左から失礼。

右耳の通信機に手を当てて困惑するキャプテンの、言葉通り左側の空間に突如として円形の穴が空き。蘇った鷹が、軽やかに大空を舞った。

それを皮切りに次々と空間を超えて援軍がやってくる。様々な感情のこもった瞳でキャプテンを見つめるティ・チャラ陛下。シュリさんにオコエさん、ワカンダの戦士たち。ヴァルキリーさん率いるアスガルドの軍勢。世界中からやってきた魔術師たち。ああ、地下から巨大化したスコットさんが。掌からバナー博士とローディーさん。ロケットさんが肩に乗ってる。ポッツさんがアーマーを着て空を飛んでいる。そして。

自ら開いたゲートから、優雅に舞い降りる至高の魔術師。その後ろから、ロケットさんの仲間たちと――見紛うはずもない、あのスイング姿――この世界での、僕の親友。

待ち望んだ再会のはずなのに、お互い言葉が出ない。溢れ出しそうになる涙を堪えて、ただ無言で頷きあう。さっきの陛下とキャプテンも、同じ気持ちだったんだろうか。

「アヴェンジャーズ！」

キャプテンの声が聞こえる。そうだ、今はまだ、戦わなくちゃいけない。ピーターともう１度頷きあい、前を向く。

「……アッセンブル」

敵味方の雄叫びと共に、最後の戦いの終わりが始まった。

個性把握テスト１

「――どう、出久。美味しい？」
「うん、凄く美味しいよ母さん。いつもありがとう」
　親子団欒、穏やかな２人きりの食卓。白いご飯に味噌汁、焼き魚。温かい和食を、愛する家族と一緒に食べる。この世界、この国では多くの人が当たり前と認識していることが、僕たちにとってはこんなにも嬉しい。遠い世界、異国の地、そして――全宇宙の命の半分が消失した５年を過ごした僕にとっても、１０日も行方不明になっていた息子が、変わり果てた姿で見つかった母さんにとっても。
「そういえば、入試の結果は今日明日くらいに着くんだっけ？」
「うん、そのはず。まあ心配はしてないけどね」
　ずずっと味噌汁を飲みながら答える。自己採点したけどやっぱり英数理のおかげで筆記は合格ラインを余裕で越えていたし、実技の方も周囲のポイント獲得状況を見るに平均より上だった……はず。他の会場がよっぽどすごかったら別だけど。まあその場合でも筆記と合わせれば合格は問題ないと言い切っていいと思う。

「出久、本当に変わったわねえ。落ち着いてるというか、自信があるというか。体だって大きくなってるし……いつの間にか大人になっちゃったみたい」

「は、ははは……そ、そうかな」

苦笑いで誤魔化しつつ頬を掻く。実際、もうハタチ過ぎてるからね、僕。母さんに嘘を付くのは気が引けるけど、まさか本当のことを言うわけにもいかない。事情もあるけれど……話したら話したで卒倒しそうだな、母さん。

母さんが洗い物をしてくれてる間にお茶の準備をする。お茶っ葉と湯呑、それに急須。ケトルに水を入れてスイッチ・オン。元々好き嫌いはなかったんだけど、最近の僕はすっかり日本好みになってしまった。ずーっとアメリカかヨーロッパにいたら誰でもそうなってしまうというのもあるけれど、周りの人の影響も多少、いや、結構ある。殆ど毎日チーズバーガー、たまにシャワルマの人とか、軍の粗食になれきってしまっている人とか。

お湯が沸くのを待つ間に郵便受けをチェックする。チラシの類に、検針票に……あ。

「母さん、通知来てた。もう開けちゃうね」

え、ええ!?ちょっと、ちょっと待って!なんて聞こえるが気にしない。今更慌てたって結果は変わりゃしないんだし。ビリっとな。中に入っていたのは書類と……なんか似たようなのシールドで見たことあるな。携帯型のホログラム装置？

『んっん～～……私が投影された!!!』

「オールマイト!?!!」

え、なんでだ？雄英からだよね？

『驚いたかい？実は私は今年から雄英に教師として務めることになってね……そして！君の合否通知に私が投影された理由は……緑谷少年！主席合格おめでとう！敵ポイント４９ポイント！審査性救助活動ポイント３０ポイント！合計で７９ポイントだ！特に救助活動ポイントでは０Ｐ敵にチームワークで立ち向かったことが評価された！おめでとう！来いよ！君のヒーローアカデミアへ！』

オールマイトの姿が消える。主席合格か……あのチームワークが評価されたのなら嬉しいな。やったわね合格よそれも主席ですってすごいわねお祝いねと抱きつく母さんの声がどこか遠くに聞こえる。これが実感がわかないってことなんだろうか。少しずつ、ゆっくりと頬が上がり笑顔になっていく。なんだかんだ言って、やっぱり僕は雄英に入りたかったらしい。

――ところで。この精密機械各自で捨てなくちゃいけないの？リサイクルの適用とかどうなるんだろう……

――春。新生活始まりの季節。

「アヴェンジャーズ・タワーを思い出すなあ……」

僕は雄英高校の校舎、校舎というか最早高層ビルを眺めながら呆れていた。どれだけ金あるんだ雄英。というか、いくら個性社会、ヒーロー社会とはいえ、いち高等学校に与えていい規模じゃなくないかなあ。なんかこう、もっと敷地の広さとか建築法とかで規定ないんだろうか。

呆れながら校内を進むけど、内部もやっぱり色々でかいし広い。それでいて内装はどこか近未来的で、シールドや新しいアヴェンジャーズ基地を思い出す。あちこち眺めながら辿り着いた僕のクラス、1―Aのドアもやっぱりでかい。これはバリアフリーとか、異形型の個性に配慮してるのかな、これならハルクさんでも入れそうだな、なんて考えていると。

「机に足をかけるな！雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないとは思わないか!?」

「思わねーよてめーどこ中だよ端役が！」

中から聞き覚えのある声が2つ。……僕の高校生活、初っ端から波乱の予感しかしない。

「ボ……俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ」

「聡明～～～～？くそエリートじゃねえか。ブッ殺し甲斐がありそうだな」
「君ひどいな本当にヒーロー志望か!?」
　ある意味予想通りといえば予想通りな会話。ちょっと話しただけで生真面目な印象を受けた飯田君とかっちゃんが絡めばこうなるよなあ。兎も角、いつまでもドアの前で突っ立ってるわけにもいかないのでドアを開けて声を掛ける。
「飯田君、かっちゃんは昔からそういう性格だからもう気にしない方がいいよ。まあ、最後の最後というか、破っちゃいけないとこは弁えてるはずだから……多分、おそらく、きっと……多分ね」
「緑谷「んだとクソデクこらぁ！ブッ殺すぞ！」君！」
「おはよう飯田君。それにかっちゃん、性格は今更変えられないのも、実際に殺したりは絶対にしないのも知ってるけど、ヒーロー志望が入学初日にクラスメイト怖がらせてたらダメでしょ。……はい、どうぞ」
　ドアを開けたまま後ろでアワアワしていた気配の女の子に道を譲る。突然で驚いたみたいだったけど、おずおずと入ってきた。どこかで見たことあ――うん？僕の前で立ち止まったけど、何か用事？
「あ、ありがとう！それに、入試の実技の時も助けてくれてありがとう！」
　僕と同時に飯田君もあっ、という顔をした。０ポイント敵の前で動けなくなっていた

子だ。なら、少し屈んで視線をしっかり合わせる。相手が安心するような笑顔を心がける。

「どういたしまして。大きな怪我もないようでよかったよ」

自己犠牲はヒーローの本質で、見返りを求めるものじゃない。けれど、助けられた人々の中にはそれを屈辱に感じる人だっているかもしれない。そうじゃない人でも、お礼や感謝、謝罪を言いたい人もいるし、それを受け取ってもらえないことが精神的なしこり、負担になる人もいる。これも、向こうのヒーローたちから学んだことだ。だから、こういう言葉はしっかりと受け取るようにしてるんだけど……なんか余計アワアワしてないかこの子。カワイイけど。

「いいい、いえいえそんな今日って式とかガイダンスだけかな先生ってどんな人だろう緊張するよね」

「う、うん。そうだね、でもちょっと落ち着いて」

「――お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

冷徹な声。振り返ると、何故か寝袋に入って転がってるおじさんがいた。

「ここは……ヒーロー科だぞ」

言いながら取り出したゼリー飲料を一気に飲み干すおじさん。怪しすぎる。

「ハイ、静かになるまで８秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠くね。……担任の相澤消太だ、よろしくね」

寝袋を脱ぎながら立ち上がり挨拶するおじさん改め相澤先生。皆が『先生!?』とか『担任!?』とか心の中で思っているだろうけど、僕が気になったのは。

「合理性を求めるなら、もっと早くに教室にいて、もっと担任だとわかるような服装や説明をすればよかったのでは……?」

先生含め、シーンとなる教室。……僕は悪くない。その後、体操服を着てグラウンドに集まることになったんだけど。渡された体操服を配ると時に青山君が同じクラスだって気づいて嬉しかったのが救いだった。

「個性把握テストぉ!?」

１０分後、グラウンド。要するに、個性ありの体力テストをやるってことか。入学式もガイダンスもなし。ヒーローになるならそんな悠長な行事出る時間ないよ、とのこと。

「雄英は自由な校風が売り文句。そしてそれは先生側もまた然り」

……大丈夫かなあこの学校。いくら自由が売りだからって、最低限の教育規定とかあ

ると思うんだけど。特例で許されてるとかじゃなくて、普通に傲慢で無視してるとかありそうで怖い。僕の勝手な妄想であってほしいけれど。

「――おい、入試1位の緑谷。ソフトボール投げやってみろ。円から出なきゃ個性使っても何してもいい早よ……と言っても、お前は無個性だったか」

無個性!?とか嘘だろとかクラスメイトがざわついている。嘘じゃない。僕は今でも無個性だ。個性因子だって持ってない。

渡されたやたらとハイテクなボールを軽く握る。溜めを作り、力を無駄なく移動させる全身運動。体全体の筋肉を効率的に稼働させて――放つ！

「――しっ！」

力を入れて握ると壊してしまいそうだったのと、普段投げている盾より軽すぎて難しかったせいか、ちょっと流れてしまった、反省。直後、ピピっと相澤先生の方から電子音が鳴る。

――７１０．１ｍ。

「……本当に無個性でこの記録か。何食ったらそうなるんだか」

出た記録に再びざわつくクラスメイト。敵意剥き出しの目で睨んでくるかっちゃんと、呆れ顔の相澤先生。

――食べるんじゃなくて、薬物を注射するんですよ。という言葉は、心の中で留めて

おくことにした。

シビル・ウォー　／　キャプテン・デク・オリジン

――この男を、自分は殺せない。

雪が積もる白に染まった孤島で、そんなことを思ってしまった。

ヘルムート・ジモ。国連へのテロの首謀者。キャプテン・アメリカの盟友、バッキー・バーンズを操った男。アヴェンジャーズを分裂させた男。尊敬する父の仇だ、今もまだ恨んでいる。この気持ちは、生涯消えることはないのかもしれない。それでも、殺せないと思ってしまったのだ。バーンズが犯人だと思っていた頃には、明確な殺意が渦巻いていたというのに。我ながら勝手なものだ。しかし、1度思ってしまったものはどうしようもない。理屈ではないのだ。

拘束し、捻り上げた右腕に力を込める。ジモの手から拳銃が滑り落ちた。同時にジモの全身から力が抜けていく。自殺は諦めたらしい。ほっと息をついて立ち上がろうとしたその時。

衝撃。

島が揺れる。地面が震える。堪えきれずジモ諸とも無様に転がってしまった。地震？いや、この島の周囲には、海底火山などはなかったはずだ。そもそも地震が起きない場所を選んで施設を建設したはず。

地下にある施設の何処かにいるであろう、スティーブ・ロジャースやトニー・スタークの戦闘の影響ではない。規模が大きすぎる。――今度は何だ!?

突如として響く不協和音。何かが悲鳴を上げるような、こすれる様な、割れたような音。同時に、少し離れた空間に孔が開き始めた。徐々に広がりつつある孔の向うは黒く、その先を見通すことはできない。しかし、吹き付ける風から、そこから何かが出てこようとしていることはわかった。

「ジモ！これは――これは一体なんだ！何をしたんだ!?」

同じように雪に膝を付くジモに向かって叫ぶも、その顔にあるのは困惑だった。

「ち、違う！私じゃない――何が起こっているのか、私にもわからない！」

「くっ――――！」

偶然？自然現象？ワカンダは科学の国だ。諸外国に対してカモフラージュしているが、その科学技術は世界一だろうという自負がある。シールドですら、ワカンダには追いつけない。しかし、そのワカンダの技術を以ってしても、空間に孔を空けることなど

できるだろうか。それだけではなく、明らかに何かを呼び出そうとしている。高度に発達した科学は魔術と見分けがつかないと一般的に言われるが――時間と空間を超えて何かを呼び出すことは、今の科学では難しい。間違いなく、何か超常的な現象が起きている。

孔が広がると共に大きくなる振動と吹き付ける風。ついには孔から雷さえ出始めた。そして閃光。同時に収まる揺れと風。圧倒的な光量に思わず閉じてしまった目を開けた時、そこにいたのは――小柄な、少年だった。肌の色や顔立ちからすると、どうやらアジア系らしい。そのせいか、いっそ幼くも見えてしまう。ただそれにしては、やや緑がかった髪が特徴的だ。……どうやら、彼は自分の意思で此処に来たのではないらしい。一目でそうわかるほどに、彼は戸惑い辺りを見渡している。

その顔が、驚愕に染まった。同時に雪に脚を取られつつ、転びながらも必死に駆け出す少年。その視線の先には、再び銃口を自らのこめかみに向けるジモがいた。まずい！あれでは、少年も間に合わない。咄嗟に手近に転がっていた石を拾って投げる――当たった！

それからの光景は、いつまでたっても記憶から薄れることはないだろう。この、罪の記憶は。

体勢を崩すジモ。滑り落ちる雪と、その先の崖。駆け寄る少年が手を伸ばす。咄嗟に

崖を掴もうとするジモの、銃を握ったままの手。少年がジモの手を掴むと同時に轟いた――銃声。呆然とするジモと、純白を赤く染める鮮血。腹部を撃ち抜かれながらも、彼はジモの手を放さなかった。

「少年！」

急いで駆け寄り、少年とジモを崖際から引っ張り上げる。ジモは今度こそ死ぬ気はなくなったようで、茫然と座り込んでいる。少年は――まずい。弾は貫通しているだろうとはいえ、撃たれた場所が腹部だ。それに、この場所では満足な治療などできるはずもない上に、シベリアの孤島……医療施設に搬入するまで、持たない……！

「どうして。どうして助けようとしたんだ。そのまま死なせればよかったんだ。見ず知らずの男のことなど、見捨てればよかったんだ……」

相変わらず茫然と呟くジモの目には、何も映っていなかった。その空虚な呟きに、少年が反応する。弱弱しく、しかし、確かな熱を持って。

『何故……何故って、それは……貴方が、助けを求める顔をしていたから……！諦めちゃ、ダメです。生きることを、諦めないで……っ！ごふっ！』

言葉はわからない。聞きなじみのない異国の言語での、途切れ途切れの弱弱しい言葉。当たり前だ。――けれども。その言葉に込められた熱は、確かに、私とジモの心に届いていた。虚ろだったジモの目に火が灯る。この少年を、死なせてはならない！

「……下の施設に、零れていない血清が幾らかあったはずだ」
ジモが少年の腹部を抑えて止血しつつ呟いた。
「血清……超人血清か！」
「ああ、バッキー・バーンズと同じ、ウィンター・ソルジャーを作る為の血清。この施設は粗方破壊したが、1人で大雑把に壊して回った。その時、容器だけ破壊されて、幾らか零れずに残ったものがあったはずだ。スティーブ・ロジャースに投与されたオリジナルには及ばないだろうが、それでこの少年の治癒能力を強化できれば……！」
――助かるかもしれない。
「私が取りにいこう。止血は任せた。……死なないでくれ」
最後の言葉は2人に向けて。ジモと眼を合わせた後、すぐさま走り出した。

――遠くから、声が聞こえる。
『……ル低下！出血量が多く、危険です』
『……までh……分かか……わない！』
僕は、このまま死ぬんだろうか。あの男の人は無事だろうか。
『……血を……かない……』

『……テンの……を!?そr……影響が……』

思い出すのは、僕を助けようとしてくれたかっちゃんの顔と――母さん、父さんの顔。親不孝な息子、で……ごめん……なさ……い……

……

……

……

――夢を視た。何の力もない、それどころか病弱で、人よりも劣る青年が、ヒーローを志す夢を。

綺麗ごとではない戦争を視た。恩人の死も、人に操られる理不尽も、人の命を奪う経験も。不器用な恋心も、友の死も。そして、自らの命を犠牲にしてでも他を救う、その精神を。そして、何よりも心に残った、彼のオリジンを。

『――完璧でなくとも、善良な君のままで』

――眩しい。

最初に感じたのは、光。瞼越しに光を感じ、ゆっくりと眼を開ける。真っ白な天井。これは――ベッドに、寝ていたのか。戸惑いながら上体を起こす。入院の時に着るよう

な、ガウンみたいな青い服。白に統一された部屋に、腕に繋がれた点滴のチューブ。

病院、か。助かった……のか。そこまで考えた所で、違和感に気づいた。僕の腕、こんなに太かったっけ？ベッドの横に置いてあったスリッパを履いて、恐る恐る立ち上がる。やっぱりおかしい。いつもより目線が高い。まさか、入院中に背が伸びるほど意識不明だった？というか、此処は、この病院は、何処なんだ？

戸惑ってばかりいると、突然音もなく離れた場所にあった扉が開く。入って来たのは——黒人の女の子だった。外国の人の年齢はよくわからないとは言われるけど、僕とそんなに歳は違わない気がする。少なくとも１０代……だと思う。ぼんやりと見つめていると、彼女はにっこりと笑って、流ちょうな日本語で喋り出した。

「よかった、目が覚めたのね。みどりたにでく君……でいいのかしら？」

これが、僕のオリジン。この世界での、キャプテン・デクの始まりだった。

個性把握テスト２

「７００ｍ超ってマジかよ!?」
「個性使っていいんだ!?流石ヒーロー科！……今のは使ってないみたいだけど」
『無個性』であるはずの僕の出した記録にクラスメイトたちがざわついている。驚愕、称賛、懐疑。その内容は様々だ。
　エイブラハム・アースキン博士の名は、人体改造という人道面への配慮や軍の機密により一般的には知られていない。けれども、彼は世が世なら間違いなく人類史に名を残した唯一無二の天才だった。ヒドラやシールド、その他数多くの組織が博士の開発した超人血清の再現、量産を試みたが、その尽くが失敗に終わっている。正確には似たようなものは作成できたが、その効果量はオリジナルには及ばなかった。目安として成人男性１０人分、そして『人が人のまま到達できる最高の身体能力』というスティーブ・ロジャースの肉体ほどには強化はされない。ただ、その領域に最も迫ったのがヒドラの暗殺者、ウィンター・ソルジャーたちだった。
　僕が多次元宇宙を渡ったあの日、命を繋ぎ止める為にそのウィンター・ソルジャーの

為の血清を不完全ながらも投与された。それだけなら、僕はちょっと身体能力が高いだけ、になっていただろう。大量の出血を補うために、ワカンダへ輸送中のジェットで急遽輸血されたキャプテンの血液がなければ。細かい理屈はわからないし、別段知ろうとも思わないけれども。兎に角、結果として僕はキャプテンに匹敵する肉体を得た。だからこそのこの記録だ。

「ははっ！スゲー面白そう！」

その言葉に、相澤先生が反応した。

「……面白そう……か。ヒーローになる為の3年間、そんな腹づもりで過ごす気でいるのかい？」

……あ、嫌な予感がする。真顔のまま静かにキレてるフューリー長官みたいな、そんな感じ。

「よし。トータル成績最下位の者は見込みなしと判断し、除籍処分としよう」

「「「はあああああ!?」」」

「生徒の如何は先生の自由。ようこそ、これが雄英高校ヒーロー科だ」

ええー……

視界の端でドヤ顔をキメる先生を横目に、僕は内心ドン引きしていた。初対面から割と酷かった相澤先生の印象が更に悪化する。

除籍ってそもそも先生個人で決定できるんだっけというのはこの際置いておこう。そういう権限を特別に持たされてるのかもしれないし。けどいくらなんでもまだ顔合わせて1時間も経ってない生徒を除籍させるのはダメでしょ……。まあ百歩譲って『心構えが甘い』という理由で除籍するとしても、せめてさっき『面白そう』って発言した生徒じゃないと。なんでそこで成績最下位の生徒なわけ？その最下位の生徒が、先生の言うところの腹づもりが超しっかりしてる、精神的に非の打ち所がない、けれどもこういうテストで記録を出しにくい個性だったらどうするんだろうね。あとここって一応国の認可を受けた高等学校だよね。除籍ってことは一生経歴にバツが付くんだし、こんな理不尽な理由でって保護者から教育委員会に訴えられたらどうするの？

「（まあそんな酷かったらいくらプロヒーローとはいえすぐにクビになるだろうから、実際には救済措置とかあるんだろうけど……顔が本気なんだよなあ）」

それに。ヒーローであることと、完璧であること、人格者であることはイコールじゃない。僕はそれをあの人たちの傍らで学んできた。スタークさんも、ソーさんも、バートンさんも。バナー博士も、ナターシャさんも、あのキャプテンでさえ決して完璧じゃなかった。油断することもあった。間違いを犯すこともあった。皆が僕らと同じ等身大の人間で、悩み、傷つき、それでも彼らは間違いなくヒーローだった。

改めて考えると、真っ先に浮かんだスタークさんもソーさんも、普通に面白そうって

言いそうだな……。だから結成当初は色々ぶつかりあったんだろうし、２人を嫌ってるヒーローもいるんだろうけど。

これでもし普通に除籍のみでなんのフォローもなかったら転校も考えないとな、なんて心の中で呟きつつ、とりあえずテストの続きを受ける。種目は８つ。ソフトボール投げ、立ち幅跳び、５０ｍ走、持久走、握力、反復横跳び、上体起こし、長座体前屈。個性を使っていいこと以外はごく普通だ。無個性の僕も普通に挑戦するだけ。

取り敢えず最下位は回避できそうなので、皆の個性の活かし方を眺めつつ平常心でテストに望む。今朝のワタワタしてた女の子がソフトボール投げで∞を出したのには驚いた。個性との相性によっては測定不能なんてのも普通にあるんだなあ……。

長座体前屈は至って普通。５０ｍ走、反復横跳びはそこそこ。僕は身体能力が高いだけであって、身体構造はあくまで普通の人間だ。人間の身体の摂理を超越はできない。エンジンで一気に加速できる飯田君や、峰田君の個性の活かし方には及ばなかった。立ち幅跳び、握力と上体起こし、持久走は１位をとれた。八百万さんがいきなり身体からバイクを創り出したのは驚いたけど、一般的なバイクくらいなら僕なら勝てる。そういえば、陛下とバーンズさんとキャプテンが車道でチェイスをしたことがあるって言ってたなあ。詳しくは知らないけど、カーチェイスならぬ生身チェイス。……追い越された走行中の車の運転手さんの衝撃はすごかったんだろうなあ。

途中僕の記録に突然キレだしたかっちゃんが僕に襲いかかろうとして相澤先生に止められるひと悶着があったけれども（この時にわかったんだけれども、どうやら相澤先生はイレイザー・ヘッドらしい）なんとか個性把握テストは無事終了。最下位の自覚があるのか真っ青な顔で震える峰田君を前に先生が言う。

「ちなみに除籍はウソな。君らの最大限を引き出す合理的虚偽」

「「「「はあああああ!?」」」」

再びの絶叫。八百万さんはあんなの嘘に決まってる。ちょっと考えればわかる、なんて言ってるけれど……どうだろね。僕には誰かわからなかったけど、面白そうって言った生徒が最下位だったら容赦なく除籍にしてた気もするよ、あの先生は。

――放課後。

飯田君も電車通学らしく、駅まで一緒に下校しようと誘ってくれた。勿論快諾する。折角なので青山君はどうなのかと聞いてみようとしたら、いつの間にか消えていた。うーん、彼の生態、割と謎だ。

「うーん、よくあるのは一瞬だけ加速してすぐに戻したり、常に緩い加速状態にしておく方法だけど……燃料式で、有限ならちょっと厳しいね」

「そうなんだ。短距離を高速移動すると、どうしても動きが直線的で単純になってしまう。どうにか改善したいと思っているんだが、これが中々難しくてね」

お喋りの話題は個性の応用の話。飯田君が自分の個性について僕に詳しく話してくれるくらいに仲良くなれた。……うん。いいな、こういうの。

「お2人さーん！駅まで？待ってー！」

背後からの声に2人して振り返ると、とてて……という擬音が似合いそうな可愛らしい走り方で駆け寄ってくる女の子がいた。

「君は∞女子」

む、∞女子……ネーミングセンスが独特だな飯田君。

「麗日お茶子です！えっと飯田天哉君に緑谷……デク君！だよね!!」

「ああいや、本当は『いずく』で、デクはかっちゃん――掌爆発させてた男子が木偶の坊から付けたんだけど……」

「蔑称なのか」

眉を顰める飯田君。うん、やっぱり良い人だ。

「うん、でも2人ともデクでいいよ。最近は――周りの人皆からずっと、そう呼ばれてたから」

そうなの？ときょとんとして首をかしげる麗日さん。可愛いなあ、なんて見つめなが

ら、僕はあの２人の言葉を思い出していた。

『イズク――ああもう呼びにくいな。もうボーイでいいだろう。ダメ？アジア辺りの名前は呼びにくいんだよ……何か他の呼び方とかないのか？ほら、あだ名とか。……デク？いいじゃないか、デクじゃあそれでいこう。蔑称？なら尚更だ。大いに自慢してやれ、そんなの気にするな。こういうのは開き直った方が勝ちなんだよ』

『キャプテン・アメリカだって、最初は軍のマスコットだったんだ。戦いもしない、国債を募るショーに出るだけのプロパガンダだって揶揄もされた。けれど、僕は今もこの名前を誇りに思っている。君も同じだ、イズク。デクという呼び名が、君の誇りになるように、頑張ろう』

「そう――キャプテン・デク。それが、僕のヒーロー名だからね」

戦闘訓練1

入学式の翌日からは、思ったよりまともな高校生活が始まった。カリキュラムを見るに、どうやら必修の一般教養科目は午前中に集中させてあるらしい。久しぶりの日本の学校で、友人たちと授業らしい授業。英語担当のプレゼント・マイク先生がやたらとテンション高かったことを除けばごく普通の内容だったけれども、僕にはそれが嬉しかった。（現代文の授業で縦書き日本語満載の教科書を読んでて泣きそうになったのは内緒だ）

昼は学食。大食堂で一流の料理を安価で頂ける。白米に落ち着くよね最終的に!!とは食堂担当のクックヒーロー・ランチラッシュの弁。全く同意だ。メインの鯖の味噌煮も、ご飯も味噌汁もものすごく美味しかった。飯田君には渋いな君は!と言われた。（味と懐かしさで泣きそうになったのはやっぱり内緒だ）

――そして午後。

「わーたーしーがー!!普通にドアから来た!!」

ヒーロー科独自の科目、ついでに単位数も最大のヒーロー基礎学の授業の時間。1人

だけ画風が違いすぎるトップヒーロー、オールマイトがシルバーエイジのコスチュームで教室に入ってくる。合否通知で聞かされたけど、本当に教師やってるんだなあ。まあ、ヒーロー基礎学しか担当しないらしいので、教員免許持ってない、プロヒーローとしての講師枠なのかもしれないけど。しかしそう考えると、プレゼント・マイク先生のわかりやすい授業や、エクトプラズム先生のあの数学への造詣の深さってすごいことなんだなあ。

「着替えたら順次グラウンド・βに集まるんだ!!」

おっと、いけないいけない。集中しないと。

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!!自覚するのだ!!!!今日から自分は……ヒーローなんだと!!」

皆個性届と要望に沿って作られた、思い思いのコスチュームを着てグラウンドに移動する。ちなみに僕は無個性なので、丈夫に作られてる以外はほぼ見た目だけ。向こうでのキャプテンの戦闘服からマスクを抜いた感じだ。因みに、ファッションセンスはキャプテンが７０年前の人なんだと実感する話題の１つでもあったりする。個性社会である『こちら』ならともかく、ヒーローが最近まであまり認知されていなかった『あちら』でキャプテン・アメリカの初代コスチュームを着るのは中々勇気のあることだと思うんだけど……キャプテン、現代でも普通に着こなしてたなあ。多分あちらの人からする

と、日本で言う昭和のファッションや髪型の人がそのまま現代で動いてるようなものだったと思う。

あちらに思いを馳せている中、オールマイト先生の説明は続く。屋内での対人戦闘訓練……僕たちが「敵組」と「ヒーロー組」に分かれての2対2の屋内戦、か。

「勝敗のシステムはどうなります？」「ブッ飛ばしてもいいんスか」「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか……？」「分かれるとはどのような分かれ方をすればよろしいですか」「このマントやばくない？」「いや青山君それはおかしい」

「んんん～～聖徳太子ィィ!!!」

おっと思わず最後に青山君に突っ込んでしまった、反省。そして慌ててカンペを見ながら説明をするオールマイト。失礼だが控えめに言っても先生っぽくないし、明らかに慣れていない。元から驚異の倍率の雄英高校だ、集客の為じゃないだろう。今年の合格者の中にどうしてもＮｏ．１ヒーローの指導を受けたいという政財界の重鎮の子どもがいた、なんて非現実的な理由じゃなければ――高校側か、オールマイト。あるいはその両方に、オールマイトが赴任しなければならない理由がある、ってことか。……気にはなるけれど、今は授業に真面目に取り組もう。折角縁がある人と同じペアになれたみたいだしね。

状況設定は『敵組』がアジトのビルに核兵器を隠していて、それをめぐる攻防戦。制限時間は１５分。支給された「確保テープ」を巻きつけてお互いを捉えるか、制限時間までに核兵器を回収するか、守り切るか。ヒーロー組は敵組の５分後に行動開始で、ヒーロー側に核兵器の位置は知らされていないという点まで含めて、かなり実践的な内容だ。どちらの勝利条件の達成を目指すかで、とるべき行動が大きく変わってくるな。

「え、えーと。作戦はどうする？」

完全ランダムのくじで僕とコンビ、ヒーロー組になった麗日さんが緊張気味に相談してきた。先にアジトの中に入ったのはかっちゃんと飯田君の敵組。……なんだか縁がある人ばかりだな。

「そうだね。これは予想……でも９９％当たると思ってるんだけど。まず間違いなくかっちゃんが単騎で突撃してくる。何せ短気だからねかっちゃんは」

「っそ、そうなん？」

笑いを噛み殺しつつ聞き返す麗日さん。うん、緊張は少し解れたかな。

「うん。個人的怨恨とかそういう理由で。正直なところ、これがあるとはいっても麗日さんを守りながらかっちゃんを正面突破するのは……簡単じゃない、かな。だから――」

できない、とは言わない。ただ、今回はそういう授業じゃないだろう。盾を装着した

腕を上げて、ガッツポーズする。
「麗日さん、逃げようか」
「ほへ？」
変な声を出してきょとんとする麗日さん、カワイイ。

ＢＯＯＭ！
曲がり角、音を殺した綺麗な奇襲。やっぱり来た。麗日さんを背にしつつ、盾を構えて爆発から身を守る。麗日さんとアイコンタクトをして頷きあう。
「避けてんじゃねえよクソデクがぁ！」
続けて右の大振り。これも予想通り。右腕を掴んでかっちゃんの懐に入り込み、左手で左手首を掴んで抑える。そのまま、片手1本背負い！
「ガハッ……!!」
「当然避けるよ。僕は――デクノボウじゃないからね」
距離を取りつつ敢えて挑発的に言う。追撃や確保テープを巻きにはいかない。かっちゃんなら、僕に捕らえられるくらいなら自爆する、なんてのは普通にやりそうだから。
さて、どうなるかな？
「……ムカツクなあ」

大の字に転がったまま、ポツリと漏らすかっちゃん。そのまま、ゆっくりと立ち上がる。

「チョーシ乗ってんじゃねえぞクソナードォ！」

両手の爆破で勢いをつけてからの飛び蹴り。盾を構えつつ、僕は予定通りに後退を開始した。かっちゃんの攻撃を防ぎ、躱し、時には反撃して攻撃の出を抑えつつ慎重に後退する。確かにかっちゃんは凄い。僕とは違って、才能の塊のような男。それでも、あの天才――トニー・スタークには及ばない。生身同士ならかっちゃんが勝つだろうけど――アイアンマンには及ばない。しのぐだけならできる。両の掌から推進力を得て加速するその移動法は、あの人の姿に重なるから！

『デク君、聞こえる？４階も大丈夫やった。今から５階に上がるね』

「了解。気をつけて」

かっちゃんに気づかれないように、盾を掲げて口元を隠しながら小声で麗日さんからの通信に返事をする。予定通りだ。かっちゃんは、麗日さんがいなくなっている事に気づいていないか、気づいていても気にしていない。さて、上手くいくかな。

「ぬかったなヒーロー!!フハハハハハ」

綺麗に片付けられた5階の真ん中のフロアで笑う飯田君。様に……!!なってる……!!　そのままじりじりと近づいてくるけれど、手を構えるとちょっと下がる。うん、デク君の言った通り。

「デク君、今飯田君に見つかったよ。場所は5階の真ん中のフロア。間取りは同じで、障害物はなし！」

『ありがとう。それじゃあ、打ち合わせ通りに！』

「わかった！」

ってうわ！下から凄い爆発音。けど、飯田君も戸惑ってる……チャンスだよね。個性を自分に使って、走り出したあと……飯田君の手前で、ジャンプ！

「自身も浮かせられるのか!!」

「解除!!――負担の大きい超必です！」

空中で解除して、落下しながら核を狙うけど……抱えて逃げられちゃった。

「君の個性は触れられない限り脅威ではない！このまま時間いっぱい粘らせてもらうぜ！ぐへへへへ！」

やっぱり、積極的には近づいてこずに逃げ回るつもりだ。……デク君、すごいなあ。

「ぬう……！」

悔し気に唸りながら立ち上がって、飯田君の方を向いたまま窓を開ける。気にしては……ない、よね？またちょっとずつ牽制で近づいてくる飯田君……もう少し。

「デク君、１０時の方向、中心から７ｍ。……お願いします！」

窓の外に一瞬ふわっと現れたデク君が、盾を投げて落ちていった。投げられた盾が、壁や柱に当たって跳ねる音がする。

「む！な、なんだ!?」

驚いてる飯田君の横を通り過ぎて、背後の壁に当たって跳ね返る――今！さっきと同じように、ジャンプ！

「確保!!」

「ぐぉっ!!ってああーー核ーー!!!」

うちが核に抱きついたのと、背中を盾に打たれた飯田君が立ち上がるのがほぼ同時。

『ヒーローチーム……Ｗ　Ｉ　Ｉ　Ｉ　Ｉ　Ｎ　!!』

やったね、デク君！

戦闘訓練2

「戻るぞ爆豪少年。講評の時間だ」

吐き気をこらえる麗日さんを飯田君と2人で介抱しつつ降りてくると、荒い息で呆然と立ち尽くすかっちゃんにオールマイト先生が声をかけるところだった。

「勝ったにせよ負けたにせよ、振り返ってこそ経験ってのは活きるんだ」

今回は勝てた。けれどそれは、かっちゃんが僕を狙って暴走するという前提の上での作戦が上手くいったからだ。僕の中ではほぼ確実なことだったけれども、訓練としても、ヒーローとしてもあまり良くはないやり方だったかもしれない。同年代としては間違いなくトップクラスの個性と才能を持つかっちゃんが冷静に行動していた場合、僕たちが勝てたという保証はないのだ。

……今僕がかっちゃんに声をかけるのは逆効果だろう。それに、僕はかっちゃんを信じているし――かっちゃんによく似た人を僕は知っているから、あまり心配はしていない。天才であり、それが故の欠点があり、仲間とぶつかり合い。それでも最後まで気高

いヒーローだった鉄の男を。

「今戦のベストは緑谷少年だな。次点で飯田少年だ」

モニタールームに帰ってくると早速オールマイト先生の講評が始まった。麗日さんの吐き気は治まったようだけれど、かっちゃんは相変わらず無言のまま俯き気味だ。

「次点は勝った方のお茶子ちゃんじゃないのかしら？」

顎に指を当てつつ疑問の声を上げる……えーと、確か蛙吹さん、だったっけ。

「ふむ、ならば皆に聞いてみようか。麗日少女の減点ポイントが分かる人!!?」

「ハイ、オールマイト先生。当然ですが、中盤の気の緩みですわ」

ハキハキと答える八百万さん。飯田君と同じくいかにもな優等生みたいだ。

「その通り！訓練とはいえ……いや、ヒーローを目指す訓練だからこそ、敵を前にして笑っている余裕などはないからね。核を想定しているならば尚更だ。そういう意味で、それをしっかり意識して動けていた飯田少年が次点となる」

ジーンと感動した様子で僅かに震えている飯田君。嬉しさを堪えきれないみたいだ。

「後は……麗日少女はもう少し自分の意見を出してもよかったな。ただこれに関しては、緑谷少年の策とリーダーシップが良すぎた結果ということもあるが」

「はぁい……」

落ち込んだ様子で返事をする麗日さん。大活躍してくれたし、麗日さんがいなければあんなにスムーズに勝てなかったわけで。僕としては心苦しい。後でもう一度個人的にお礼を言っておこう。そんなことを考えていると、かっちゃんがゆっくりと顔を上げた。

「……デク」

「なんだい？かっちゃん」

「……全部、お前の作戦か」

正直、少し意外だった。あのかっちゃんが、自分から皆の前で自らの敗北の話をしようとするなんて。

「……まあ、そうだね。僕がかっちゃんを挑発して引きつけて、その間に麗日さんに上に向かってもらう。最終的に僕が飯田君を妨害して、その隙に核を確保してもらうって基本方針かな。後は――最悪の想定として、飯田君が核を守りきれないと判断した時に、核を攻撃して自爆する可能性は考えてた。その場合は申し訳ないけど、麗日さんに突貫してでも止めてくれってお願いしてたね」

「……」

黙り込むかっちゃん。すると、今度は横から声が上がった。

「妨害するっつっても、よくあんな方法でやったな。もし核に当たったら終わりだろ？」

聞いてきたのは轟君だった。こっちも正直意外だ。彼は割と寡黙な印象だったから。

「壁の硬さなんかは下の階でも確認できたからね。間取りと障害物の有無がわかれば、核に当てないように飯田君だけを狙うのはわけないさ」

「……ああ。ちょくちょく通信してたのは、麗日がお前に室内の状況を伝えてたからか」

「そういうこと。麗日さんの個性対策を考えると、飯田君が障害物を排除しておく可能性は高いと思ってたからね。まあもし盾の投擲が難しい場合は――同じフロアの別の部屋から、壁を突進でぶち抜いて奇襲するつもりだったよ」

「「「「はぁっ!!???」」」」

クラスの殆どが一斉に叫ぶ。いや、そこまで驚かなくても……皆、個性把握テストの記録知ってるでしょ。

「知ってるけど改めて言われると驚く」「本当に無個性？常時発動増強型とか、異形型とかじゃなくて？」「才能マンっつーか肉体マンだな」「肉体マン……ガチムチ……」

ちょっと待って誰最後の人。というか皆一斉に喋りすぎ……さっきのオールマイト先生の気持ちがちょっとわかった気がする。ただ、そのオールマイト先生が僕を暫く無言で見つめていたのが、妙に気になった。

――放課後。

改めての自己紹介を兼ねてクラスの皆で訓練の反省会をする。ただ全員じゃなかった。切島君、砂藤君、芦戸さん、あす……梅雨ちゃんのように積極的にコミュニケーションを取ってくれる人もいれば、八百万さんのように予定がある人や、轟君のように無言で帰る人もいる。かっちゃんは……皆は引き止めたけど、直ぐに帰るみたいだ。ちょっとだけ抜けると断って後を追う。

「かっちゃん！」

「……なんだよデク。笑いにでもきたか？」

校舎から出た所で声をかける。かっちゃんは立ち止まりはしたけれど、振り返らなかった。

「そんなことはしないよ。ただ、騙してた訳じゃないとは言っておこうと思って」

「あぁ？」

かっちゃんが振り返る。その目は、予想していたよりも静かだった。

「僕の力は本当に個性じゃないけれど――突然、降って湧いたように手に入れたのは確かなんだ」

「……はっ、なんだよそりゃ。ドーピングでもしたってか？」

言葉に詰まる。正にその通りなんだけれど……正直に言うわけにはいかない。
「まぁ、そんなところ。でも――僕はそれを恥じないし、謝りもしないよ、かっちゃん」
言葉が口から勝手に溢れ出す。予め用意していた穏便な説明が吹っ飛んでいく。それでも止まらない、止められない。だって、かっちゃんだから。
「突然手に入れた力でも。受け継いだものでも、借りものでも。全部ひっくるめて、今の僕の力だから。だからこれからも、この力で君に勝つ！だって――だってかっちゃんは、ずっと勝ちたかった、僕の憧れだから！」
拳を前に突き出して宣言する。こんなつもりじゃなかったんだけど、僕たちは、これでよかった。ここから始まるんだ。
「……上等だ」
かっちゃんが天を仰ぐ。
「こっからだ!!俺は……こっから、ここで一番になってやる!!お前にも!!氷の奴にも、ポニーテールの奴にも負けねえ!!もう二度とだ!!絶対に、負けねえからな!!!」
『――いいか、デク。絶望に打ちひしがれることも、強大な力を前に心折れることもあるかもしれない。それでも、何度でも立ち上がるのがヒーローだ』
……キャプテンの言葉が蘇る。その目に溢れる涙をこぼさないように、天に向かって吠えるかっちゃんの姿は、間違いなくヒーローだった。

そのまま校門を潜っていくかっちゃんを見送る僕に、背後から声が届く。
「見事に立ち直ったなあ……私の出る幕なんてなかった。教師って難しい……」
「……覗き見ですか？趣味が悪いですよ、オールマイト先生」
振り返ると、オールマイト先生が若干息を切らせながら立っていた。
「ＨＡＨＡＨＡ!!生徒の自主性を重んじるのも教師の仕事ということにしておいてくれたまえ。それに、爆豪少年の様子を見に来たのはそうだが、緑谷少年には人に聞かれたくない内緒話があってね」
内緒話？Ｎｏ．１ヒーローが、イチ生徒に個人的に？……なんだか嫌な予感がする。
「そう身構えなくていい。ちょっとした運動のお誘いさ、緑谷少年。……私と戦ってくれないか？」

ブラックパンサー

目覚めてから暫くは兎に角忙しかった。勿論ワカンダの人たちは僕の健康を気遣ってはくれたけれども、それより優先すべきことは確かにある。目覚めてすぐの事情聴取の結果、個性関連の話でどうやら僕が全く別の世界から来たことが判明したところ、直様各種医療検査が行われた。この場合最優先で調べなくてはならないのが、僕が僕の世界独自の病原菌やその他を体内に保持していなかどうからしい。もしも、保持していたらこちらの世界では抗体が全く存在しない――つまり、甚大な被害が出てしまうとのことだった。結果としては問題なかったのだけど、かなり緊張した。

検疫的な検査が終わってからも僕は相変わらず忙しかった。アレルギー有無や、世界を移動したことによる副作用がないかどうか。僕の命を繋いだ薬――超人血清という薬らしい――や、輸血してくれた血液が特殊だったことによる影響の確認。実を言うと、既に影響は出ていると自覚はしていた。だって明らかに目線が前より高いし、腕も足も太くなってる。因みにそのことをティ・チャラさんに言うと（陛下って呼んだら、まだ王じゃないしやめてくれと言われた。そういうのいいからって）こんな感想が返って

きた。

『なんというか……アンバランスだな。幼い顔に強靭な肉体が付いている』

『幼いって……いや、まだ15歳ですけれど……』

『……すまない、デク。正直、もう少し下だと思っていた』

日本人は外国の人からよく幼く見られるとは聞くけれども。シュリさんもオコエさんも、そんなに驚いた顔しなくても。

難しい諸々の検査が終わると、ようやく身体を動かすことができた。運動できる部屋に移動して、指示に従ってリハビリを開始する。……施設内を移動する際、ワカンダの技術に驚いてあんぐりと口を開けてしまったのは、元の世界の人たちには内緒だ。

シュリさんと、その護衛のウカビさんの指示に従って、走ったり、重いものを持ち上げたり、飛んだり跳ねたりしていく。元の僕からは、というより人間では考えられないような記録がポンポン出ていく。まだ僕自身が自分の身体の使い方に慣れていないのにこれだ。僕のその様子を察したのか、横で見ていたウカビさんがアドバイスをくれると記録は更に伸びていった。

暫くそんな日々が続いて、体もほぼ全快し、僕が自分の身体能力とワカンダの食事に慣れた頃——国王陛下に謁見することになった。

『俺はエリック――いや、よそう。ウンジャダカ、だ。ティ・チャラの従兄弟で、ワカンダの王だ』

聞こえてきたのは、耳に付けた小型翻訳機で変換された日本語の機械音声。運動室で座り込んで休憩していた僕に話しかけてきたのは、ドレッドヘアー?の、どこかティ・チャラさんに似た人だった。って、国王陛下!?慌てて立ち上がって、両腕を胸の前でクロスさせる。初期のマジシャン・オブ・ブラックカオスのポーズ。

「し、失礼しました!緑や、じゃなかった。デク・ミドリヤです!」

慌てる僕がおかしかったのか、少し笑ってウンジャダカさんは手を振った。

「ああ、畏まらなくていいし、イズクでいい。俺は、客人を木偶の坊呼ばわりはしない。日本語もわかるからな」

聞こえてきたのは流暢な日本語だった。戸惑う僕にウンジャダカさんはそのまま続ける。

「俺は以前にアメリカの特殊部隊にいてな。日米同盟の関係で、軍関連には日本人や日系人が結構いる。――白人に差別される者同士、仲良くさせてもらったよ」

「それは――」

言葉が出なかった。肌の色よりも大きな違い、個性というものが発言する「超常」起

きるまで、人種差別は深刻な問題だった。中学でも、歴史の授業で学んでいる。
「イズク、お前の事情はウカビから聞いている。全世界の凡そ8割が『個性』を持つ世界。お前のような若い世代はほぼ全員が強弱は別にして『個性』を持つ。そういう世界で、お前は無個性だそうだな」
「は……い」
言葉と共に、苦い記憶が蘇る。無個性と診断された時の記憶。謝る母さん。かっちゃんに、虐められた時の記憶。
「俺は戦った」
「え？」
俯き気味だった顔を上げる。ウンジャダカさんは、真剣な瞳で僕をみつめていた。
「俺は戦った。黒人の社会的地位の向上という、父の悲願を果たす為に。力を蓄え、牙を研ぎ、戦って――ティ・チャラから、王位を勝ち取った」
勝ち取った？疑問に思っていると、ウンジャダカさんの後ろに控えていたウカビさんが解説してくれた。ティ・チャラさんとの王位を賭けた決闘に勝利したのがウンジャダカさんということらしい。ティ・チャラさんが言っていた「まだ王じゃない」というのは、そういうことだったんだろうか。
「俺はワカンダの国是を変え――ワカンダの技術を使って、世界の黒人たちを助けてい

くつもりだ。ワカンダを、世界を変える為に俺は戦う。……イズク、お前はどうする？」

僕はどうする、って……僕は、僕、は……

「『無個性』のお前が元の世界でどのような扱いを受けていたかは想像がつく。人なんざどんな世界でも同じだ。お前に関しては、俺もティ・チャラと同じく元の世界に戻れるように努力するが――お前は、このままでいいのか？このまま、諦めるのか？」

「……たく、ない……！僕は、ヒーローを、諦めたくない！」

僕が喉の奥から、心から絞り出した言葉を聞いて、ウンジャダカさんはニヤッと笑った。

「なら戦え。鍛え、磨いて――元の世界に戻った時、強くなったお前を見せつけてやれ」

「――はい！」

その後、ウンジャダカさんが組手をしてくれた。ウカビさんもだ。この世界に来て初めて、心の底から笑えた気がした。とてもとても、楽しかった。楽しかったんだ。この時は、これが最後になるんて思いもしなかった。もっと語り合いたいことが沢山あったと今でも後悔している。僕が聞いたウンジャダカさんの最後の言葉は――

「ウカビ！イズクにヴィブラニウムで盾を作ってやってくれ。形状やサイズは……ス

ティーブ・ロジャースのものと同じでいいだろう。キャプテン・イズク。……ちょっと微妙か？」

ＶＳ．オールマイト

――日曜日。

僕は制服で休日登校。教室で体操服に着替えて、オールマイト先生に連れられて体育館γに来ていた。

「緑谷少年はまだ授業で使ったことはなかったな！ここが体育館γ――通称トレーニングの台所ランド、略してＴＤＬだ!!」

……なんで態々そんな略称にしたんだ、っていうのはもうこの際置いておこう。だって雄英だし。それより気になるのは。

「一応確認ですけれど、今日は授業とか関係ない私的なお話ですよね？学校の施設を使っても大丈夫なんですか？」

後で校長先生とかに怒られたくはないなあ、なんて思っていたら、意外な答えが返ってきた。

「ＨＡＨＡＨＡ、大丈夫さ！ちゃんと使用許可申請用紙は書いたし、校長を始め先生方も理解はしてくれているからね！……というのも、私がここの教師になった事情そのもの

が関わってくるからなんだが」

オールマイト先生が教師になった理由……ただ単に、後進の育成に力を入れ始めたとかそういうことじゃないのか。それが、今日の手合わせに関係してくる？

「まあ、それは後で説明しよう。それじゃあ――始めようか！」

同時、オールマイト先生から放たれる強大な『圧』。具体的に何かオーラを噴出しているわけではない。殺気と言うほどに物騒でもない。トップヒーローとして、多くの人の命と期待を背負い続けてきたからこその――重圧。

「まずは軽くいくぞ！」

言うが早いが一瞬で距離を詰められた。直後に飛んでくる左フックを右腕の盾を掲げて受ける。ドンッという鈍い音と、おやっという顔をする先生。僕もお返しで左ストレートで心臓を狙う。硬い筋肉の感触。しっかり腕で受けられていた。

「……不思議な感触だな。硬いというよりは、柔らかく受け止められた。サポート科が開発したわけではないようだが、一体何でできてるんだい？」

「ヴィヴラニウムという金属です。先生の身体こそ、金属並みに硬いですね」

「鍛えているからね。しかしヴィヴラニウムか――聞いたことがない、なっ！」

放たれた左ストレートを沈んで躱す。そのまま身体を縦にして低空からの左アッパー。受け止められるけど、予想通り。逆回転させて、盾を押し出して上から叩きつけるようにシールドバッシュ。先生は両腕を胸でクロスさせてガード。勢いに逆らわず後方に飛んで距離をとった。

「ええ。ワカンダという国でしか採掘されない希少な金属です、よっ！」

先生に向かって駆け出す――そのまま飛びかかったりはしない。お互いの拳が届く距離で、腰を落とし気味に構えた。『君の実力が見たいんだ』と言われたからには、あまりトリッキーな戦い方ばかりなのもよくないだろう。僕の体勢を見て、先生はニヤリと笑う。

「緑谷少年、そういうところはホントに良い意味で子どもらしくないな！」

「まあ――同年代よりは濃密な人生を過ごしてるので！」

ほぼ同時に拳を繰り出す、躱す、受ける。流す、カウンターを狙う、躱される、また受ける――暫く無言で拳でのコミュニケーションが続いていく。こうして実際に手合わせしてみてわかったことだけど、どうやら先生は本格的に格闘技を習ったことがあるわけではないらしい。経験で圧倒的に劣る僕がこうして渡り合えているのがその証拠だ。

まあ、圧倒的パワーがあるなら格闘技なんて小細工必要ないのかもしれない。どんな

に優れた技を持っていても、アリはゾウには勝てない。なんて考えていたら――

「やるな、緑谷少年。じゃあ、ちょっと強くいくぞ！」

嫌な予感がして、両手でしっかり盾を構えて右フックをガードする。直後に衝撃。

――自分の身体が、まるでピンボールみたいに水平に吹っ飛んだ。

「っっ！」

倒れそうになるのをかろうじて堪える。まだ半分も出しちゃいないって顔してるのにこれか！幕之内一歩のパンチをもらったボクサーも、こんな気持だったんだろうか。

「よく踏ん張った！ほら、どんどんいくぞ！」

ムンッ！っという声とともに突き出される右拳、そして轟音。咄嗟に盾を正面に構えて踏ん張る。だというのに、１ｍくらいはそのまま後退させられてしまった。生身の人間がパンチで風を撃ち出せるなんて冗談じゃない。サノスだってこんなことできなかったぞ。

さて、どうするか。わかっちゃいたけど、オールマイトが本気を出したら僕なんて本当は一瞬でやられてしまうんだろう。ただ、これは僕の実力を確認する手合わせなわけで、勝つ必要なんて全くない。ないんだけど。

「ここで諦めるのはヒーローじゃないし……なにより。キャプテンという名に対する恥だよね」

勝機は……一応、あるにはある。ガードはされたけど確かに感じた、筋肉のあの感触。オールマイト先生の『個性』は正確には不明のままだけど、強力な増強系であることは確かだ。ただ、あのパワーを繰り出せるレベルまで筋力を物理的に高めているんじゃなくて、特殊強化の部類なんだろう。そうでなければ、人間のままの筋力では拳で風を撃ち出すなんてことはできない。キャプテンや僕でもできないんだし。

それにさっきの肉体の感触。感じたのはあくまで鍛え上げられた筋肉の硬さだった。何か特殊な力で覆われているとか、防御力までパワーと同じレベルまで増強されているわけじゃない。なら、胸を貸してやるんだと余裕を持っている今ならまだ。

「作戦タイムは終わったかな？」

「……ええ、ありがとうございます」

気にするな！と両腕を腰に当て、胸を張ってＨＡＨＡＨＡ！と高笑いする先生。さて、ちょっとくらい冷や汗をかいてくれるかな。

「それじゃあ――いきますよ！」

「ああ、さあ来い！」

走り出す。先生は再び風圧を繰り出す気だ。盾を真正面に構え、姿勢を低くする。

ゴウッ！という音とともに襲ってくる空気の塊。それに合わせて盾を斜めにそらし、その下に潜り込んだ。

「ぐっ……！」

身体に負荷がかかる。けれど――上にそらせたぞ！一転飛び上がって、空中から斜め下に向かって盾を投擲する。その間に、走れ、走れ！

姿勢を低くしたまま走り続ける。態々飛び上がったのは、オールマイトの巨躯の脇腹の辺りに狙いをつけるため。何故か少しそちらを庇うように戦っていたし、Ｎｏ．１ヒーロー、平和の象徴、オールマイト。胸を貸し、実力を測るための手合わせなら――必ず受け止めるはずだ。……ビンゴ。これで、盾の下は死角になる。

スライディングで下に滑り込んで、そのまま右膝に蹴りを入れる。流石に倒れたりはしないけれど、若干ぐらついたところを――右で股間にアッパー！……硬い感触。どうやらしっかり対策はしていたらしい。直後、明らかに手加減された蹴りによって吹き飛ばされた。受け身を取りながらゴロゴロと転がる僕。……ここまで、かな。勢いが止まったところで、ゆっくりと立ち上がる。

「や、やるじゃ……ないか……み、みどｒ……や少年……」

右手１本で盾を受け止めたまま、若干震えながら仁王立ちしているオールマイト。いや、先生。防具があったとはいえ、僕の筋力で殴った股間は、それなりの衝撃があったらしい。……少し熱くなりすぎちゃったな、反省しないと。

「ありがとうございます。先生も――って、え？」

思わず呆然と立ち尽くす。だってそこには、オールマイト先生とは似ても似つかない、盾を支えきれず座り込むガリガリの男性がいたからだ。

「……まぁ、丁度良いと言えば丁度良いか。この姿が、今回の本題だよ、緑谷少年」

けれどもその人は、正しくＮｏ．１ヒーローそのままの目つきで、そう言った。

責任

「オールマイト先生……なんですよね」

目の前で変化したとはいえ、一応確認する。そうしてしまうほどに僕の前で座り込んでいる姿はＮｏ．１ヒーローからはかけ離れていた。ガリガリに痩せこけた身体。周囲が窪み影で黒く染まった目。戦闘は愚か人によっては日常生活ですら心配するレベルだろう。

「ああ。これが私の本当の姿さ……とは言っても、元々はここまで酷くはなかったがね。これが原因だ」

そう言って先生はコスチュームを捲る。その左脇、肺に近い部分に大きな傷跡があった。今はもう白く塞がっているけれど、明らかに何かを刺された、抉られたような丸い跡。そこから放射状に広がるいくつもの痛々しい縫合痕。……一体どんな攻撃を受ければこうなるというのだろう。庇い方からどこか痛めているのかもしれないとは思ったけど、まさかここまでだなんて想像もしなかった。

「5年前……敵の襲撃で負った傷だ。呼吸器半壊、胃袋全摘。度重なる手術と後遺症で

憔悴してしまってね。私のヒーローとしての活動限界は最早1日約3時間ほどなのさ」
　5年前……毒々チェーンソー？いや、違う。ここまでやられるとは思えない。
「僕は先生についてそれなり以上に知識を持っていると思います。けれど、そんな話聞いたことがない。公表されていないんですね」
　先生が頷く。
「ああ。平和の象徴、Ｎｏ．１ヒーロー……私は常に抑止力であり、悪に屈するところを見せてはならない。私が公表しないでくれと頼んだんだ。知っているのは極僅かの関係者と……この学校の教師陣だけだ」
「教師陣……先程仰ってましたね、先生にはこの学校の教師になったのには事情があると。もしかして、後進の育成に本腰を入れる、とかいう理由で自然に引退しよう、ということでしょうか」
　僕がそう言うと先生は『オールマイト』そのままの仕草で笑い声を上げた。
「ＨＡＨＡＨＡ!!まあ確かに将来的にそうできれば嬉しいが、それなら態々君に事情を明かしたりはしないさ。私の目的は……」
　先生が、この手を取ってくれと言うように右手を僕に向かって差し出す。ただ、それは助け起こしてくれということじゃない。もっと大切な何かを譲渡するように。
「……私の『力』、私の『個性』。それは、聖火のように脈々と受け継がれてきたものなん

だ。冠された名は『ワンフォーオール』という」

力。個性。それが――受け継がれる？何を言っているんだこの人は。

「私がこの学校に来たのは、後継者を探すためなんだ。……緑谷少年。私の力を、受け継いでみないか」

「――ません！すみません！もしもし！」

耳元で大きな声を出されてふっと我に返る。顔を向けると、テレビのレポーターにマイクを向けられていた。

「オールマイトの授業はどんな感じです？」

「とても為になる授業ですよ」

足を止めて、体を向けて笑顔で言う。こういう手合は、真面目に応えるのも無視するのもよろしくない。『私はきちんと相手をしました』というポーズを見せて、当たり障りのないことかどっちつかずのことを応えるのがコツだ。そうすれば印象に残らない地味な絵になるから大体カットされる、というのがナターシャさんの弁だった。

他の生徒に次々インタビューしているマスコミを後ろに教室へ歩き続ける。考えているのは勿論、オールマイト先生、いや、オールマイトからの話のことだ。

『大変嬉しいお誘いですが……少し、考えさせてください』

憧れのヒーロー。平和の象徴、僕がヒーローを志した理由。そのオールマイトからの誘いを、僕は咄嗟に受けることができなかった。少し前の僕なら、涙を流して喜んだだろうに。……理由は自分でもわかっている。それが余計に心をささくれ立たせてしまう。卑しい理由だと自覚しているから。

教室に着いても上の空のままだ。あぁ、だめだ。こんなんじゃいけないってわかってるのに、思考の堂々巡りが止まらない。

「――やちゃん、緑谷やちゃん。3票入ってるわよ」

肩をゆさゆさと揺すられて意識が現実に戻ってくる。何をしてたんだっけ。――そうだ、学級委員を決めてたんだった。飯田君の提案で投票になったはずだ。

「あ、ごめん。ありがとうあ――梅雨ちゃん」

少し照れつつも言い直した僕を見てにっこり笑う梅雨ちゃん。そんな僕たちを見て麗日さんが怖い顔をしていた。何故だ。

なるべく麗日さんの方を見ないようにしながら黒板を見やると、確かに僕に3票入っている。僕は飯田君にいれたんだけど、一体誰なんだろう。兎に角、このままだと僕が委員長になるらしい。それはちょっと――だめだろう。

「僕に票を入れてくれた人にも、皆にも悪いんだけど――個人的事情で、辞退させてもらえないかな」

「――それで？個人的事情とは一体何だ緑谷君。僕で力になれることなら相談にのるぞ？」

昼休み、食堂で麗日さんと並んで僕の向かいに座る飯田君がカレーを食べつつ言う。隣の麗日さんは満面の笑みで『お米がうまい』を連呼していた。というか今僕って言ったな。

「ちょっと思ってたけど、飯田くんて坊っちゃん？」

「坊っ!!!!」

結構ざっくりぐいぐいといくよなあ麗日さん。飯田君の一人称が俺だったのはやっぱり態とだったらしい。代々ヒーロー一家の次男なんだとか。お兄さんはターボーヒーロー・インゲニウム。東京の事務所に６５人ものサイドキックを雇ってる人気ヒーローだ。

「規律を重んじ人を導く愛すべきヒーロー!!俺はそんな兄に憧れヒーローを志した。だからこそ、まだまだ未熟だが、そんな俺を推薦してくれた君の力になりたいんだ」

僕の辞退と推薦で委員長になったことに色々感じるものがあったらしい。……眩しいなあ。お兄さんのことといい、地に足がついてるってこういうことを言うんだろう。

僕とは大違いだ。
「例えば、僕がプロスポーツの選手だったとして」
「うん？」
突如始まった例え話に2人が首を傾げる。
「そのスポーツは2リーグ制で、僕は書類の不備とかそういう手違いでいきなりもう1つのリーグに無理やり移籍させられたんだ」
「酷い間違いやねえ」
実際の理由は酷い間違いどころじゃなかったけどね。
「仕方ないから僕は暫くそっちで頑張って——最近になって、ようやく元のリーグに戻って来られたんだよ。そしてなんと主将、キャプテンをやらないかと誘われたんだ」
「凄いじゃないか。君ならきっと務まる……いや、委員長も辞退するくらいだったな」
飯田君が難しい顔をする。そう、僕が躊躇う理由は——
「……うん。実はね、そう誘われて初めて、僕は自分が思っていた以上にその別のリーグに愛着が湧いていたことに気づいたんだ。もしも2度と元のリーグに戻れないとしても、もう1度誘われたらひょっとしたら自分から移籍してしまうかもしれないと思うくらいに」
——もしも、あちらの世界と再び繋がったら。もしも、ピーターやサムさん、ロー

ディーさんに助けを求められたら。僕は、母さんや父さん、この世界の友だちに2度と会えなくなるとしても。あちらの世界に飛び込んでしまうかもしれない。そういう考えが頭をよぎる程に、あの6年間は濃密だった。……濃密過ぎたんだ。

「そんな考えで、僕は人を導くような責任を負う資格があるのかなって……そう思ったんだ」

「……」

何を言ったらいいかわからないという感じで口ごもる2人。気にしなくていいよ、と言おうとしたところで――警報が、鳴り響いた。

キャプテン・デク

――ワカンダが開国した。

ウンジャダカ陛下は「ワカンダの技術を各国へ輸出し、アフリカ全土を発展させ黒人の世界的地位を高めることでワカンダの国是が間違っていたことを証明する」つもりらしい。開国はその1歩目だそうだ。段階的ながら観光客や国外の企業の進出も受け入れていくとのことで、陛下の『スターバックスコーヒーワカンダ店でも誘致するか』という言葉にオコエさんが目を輝かせていて、それを見たティ・チャラさんがショックを受けた顔をしていた。

ティ・チャラさんは複雑そうな表情をすることもあるけれど、元気そうに見える。王子、王ではなくなったことで前より身軽になったのか、恋人らしき人に会いにしょっちゅう国外に出ているみたいだった。本人は『他にも連絡を密にすべき人物がいる』と言っていた。僕にも紹介しないと、と。

僕はといえば連日休む間もなくボコボコにされる日々が続いている。陛下曰く『身体は最高のものがある。お前に足りないものは技術と経験だ』とのことで、この世界の常

識を学ぶ時間以外は殆ど戦闘漬けの毎日だった。ウカビさんに投げ飛ばされ、オコエさんに小突かれ、たまにふらりとやってくる陛下やティ・チャラさんにこれでもかというほどボコボコにされ、極めつけにバーンズさんの軍隊的トレーニングが待っている。

ワカンダの人たちに『ホワイトウルフ』、『バーンズ軍曹』と呼ばれているバッキー・バーンズさんは軍曹の呼び名の通り元は本職の軍人だったそうだ。ウカビさんやオコエさんに対しては身体能力任せでそれなりに粘ることができても、バーンズさんにはそれが全く通用しない。聞けば僕と同じ薬で身体能力を強化されているそうで、その上で肉体の使い方を熟知している。一矢報いることもできず、完全に遊ばれていた。ただ、本人は『俺はこっちのほうが好きだけどな』と言って銃を持つ構えをしつつ笑っていた。この上にまだ重火器の達人らしく、もうため息しか出ない。

そんな日々が暫く続いて、僕の身体に傷が増えにくくなり、それなりに戦えるようになった頃――僕は、彼に出会った。

デザインやカラーリングについて陛下に呆れられながらもあれこれ注文をつけてようやく完成した盾を受け取った数日後、ティ・チャラさんから突然呼び出されると、何故かそのまま航空機に乗せられて飛び立つことになった。近未来的なエネルギー・シー

ルドを抜けて大空に飛び立つ未来飛行機。……パスポートとか大丈夫なんだろうか。
「私は王族だからな。問題ない。君は……どうしたって問題しかないんだから気にしたって無駄だろう。まあ心配するな」
　そう言って朗らかに笑うティ・チャラさん。やっぱり前より明るくなった気がする。
「まあ確かに……僕、パスポートどころか戸籍もないですもんね。それで、今何処に向かってるんですか？」
　この世界も、個性云々の話がないだけで基本的な歴史は僕の世界と変わらない。勿論戸籍だってある。元から存在しない人間がパスポートがどうこう心配しても仕方ないか。
「詳細は開かせないがヨーロッパのとある国にあるワカンダ所有の施設の1つだ。そこで君に会いたいという人物と待ち合わせしている。会いたい、会うべきだと言っているし、私もそうすべきだと思う」
「僕が、会うべき人……一体、誰でしょう」
　この世界で僕を知っている人なんて、数えるほどしかいないはずだ。そしてその人達は皆ワカンダにいると思っていたけれど。僕がそう言うと、ティ・チャラさんはニヤリと笑った。
「スティーブ・ロジャース……キャプテン・アメリカ。君に輸血し命を救い、君の力の元

となり、君と同じ盾を持つヒーローだよ」

「やあ。君がイズクかい？僕はスティーブ・ロジャース。よろしく」

そう言って右手を差し出してきたその人は、驚くほど穏やかな人だった。施設に着く前にジェットの中でキャプテン・アメリカについての映像を見たけれども、正直イメージとは違う。鍛え上げられた肉体はしているけれども、その柔和な雰囲気は軍人とはとても思えなかった。

「い、イズク・ミドリヤです……どうも」

握り返した大きな手に力が込められる。しっかりと力を込めて手がブレないようにすると、ロジャースさんが嬉しそうな顔をした。……なんだか嫌な予感がする。

「それじゃあ、少し身体を動かそうか！」

ロジャースさんの爽やかな笑顔を見て、僕は地獄を覚悟した。バーンズさんと同じ類だ、この人。

「うん、いいな。基礎はできてきてるみたいだし……センスがあるというよりは、考えて動くのが咄嗟にできて苦にならないタイプみたいだな、イズクは」

「あ、ありがとう、ございます……」

座り込んでピクリとも動けないまま、息切れしつつどうにか返事をする。ずっと僕と同じように、それ以上に動いていたのにロジャースさんは多少汗をかいているくらいで平気な顔をしていた。どういう体力してるんだ、この人。

でも、キツイことを除けば本当に有意義な時間だった。身体の動かし方も、盾の使い方も、戦闘の心構えも……まるで　僕の思っていることが全部わかっているかのように的確なアドバイスをくれる。自分が成長しているのが実感できるから、ついついもうちょっとと頑張ってしまう。それであれだけ厳しいバーンズさんの訓練より消耗してるんだから、ある意味ではより酷いのかもしれないけれど。

「動きに癖……というよりは、オーソドックスな軍隊格闘の特徴があるのか。もしかして、バッキーに教わったのかい？」

バーンズさんを『バッキー』と呼ぶロジャースさん。そういえばさっき見たドキュメンタリーにあったけど2人は確か――

「そう、です……。2人は、幼馴染、なんですよね」

「ああ。幼馴染で、親友で、相棒だった」

その言葉に、一瞬胸が痛くなる。かっちゃん――もう会えない、僕の幼馴染。

「イズク、どうした？」

突然黙り込んだ僕を心配して、ロジャースさんがしゃがんで顔を覗き込んでくる。

……純粋なだけじゃない。悲しみも、怒りも、全てを飲み込んだようなその瞳を見て僕は、

「僕にも、幼馴染がいたんです……」

気づけば、全て話していた。『個性』のこと。かっちゃんのこと。無個性である僕と、かっちゃんとの差。齢4歳にして突きつけられた、人は生まれながらに平等じゃないという、社会の現実。

「かっちゃんにとって、僕はずっと『デク』なんです。役に立たない、木偶の坊だから。だから……すみません。バーンズさんのことを嬉しそうにしゃべる貴方を見てたら、ちょっと辛くなっちゃって……」

涙は出ない。出るのは、渇いた笑いだけだ。もう何度も噛み締めた絶望だから。

「でも君は変わらなかった」

言葉と同時に、ロジャースさんが僕の肩に手をかける。顔を上げると、真剣な瞳が僕を見つめていた。

「君がこの世界に来たのは、その幼馴染を助けようとした時なんだろう?……イズク。ヒーローとは、特別な力を持っている者のことをいうんじゃない。心の在り方をいうんだ。善い心で、行動したものがヒーローと呼ばれる。完璧でなくとも、善良なままでいた君は——きっと、その場の誰よりもヒーローだったはずだ」

『――完璧でなくとも、善良な君のままで』

意識が不確かだったとき、死の淵で見た記憶が蘇る。あれは、この人の――

「キャプテン・アメリカだって、最初は軍のマスコットだったんだ。戦いもしない、国債を募るショーに出るだけのプロパガンダだって揶揄もされた。けれど、僕は今もこの名前を誇りに思っている。君も同じだ、イズク。デクという呼び名が、君の誇りになるように、頑張ろう」

ロジャースさんが、傍らに置いてあった僕の盾を手に取る。オールマイトのコスチュームを模したデザインと、カラーリング。僕のヒーローへの憧れそのもの。それを、アメリカのヒーローの象徴たる人が、僕の手に付けてくれた。

「今日から君は――キャプテン・デクだ」

マルチバース

――落ちる。

落ちる、落ちる。いや、墜ちていく。どこまで墜ちても、周りは代わり映えしない真っ暗闇。正確には時々稲光のようなものを感じるけれども、僕が今どういう状況なのかが自分でも曖昧になるくらいになにもない。一体どこまでいくんだろうか。これがドクターの開けた穴の中だということが僕をより一層不安にさせる。至高の魔術師としての『ドクター・ストレンジ』は信頼しているけれども、スティーブン・ストレンジという個人の人間性はあんまり信用できていない。……本人に言ったらもの凄い皮肉の嵐が帰ってきそうだけれども。

グルグルと回転しながら、想像しかしたことのない無重力状態ってこんなものなんだろうかと益体もないことを考える。いい加減墜ちるのにも飽きてきたところで――先の方に、懐かしい光景が見えてきた。

「あれは……！」

何年経とうともひと目でわかる、僕の生まれ育った街の景色。僕は、ようやく元の世

界に戻れ――

「……え？」

懐かしの景色に手を伸ばしたところで、空間に浮かんだその日本の町並みにノイズが走っていく。前時代のブラウン管テレビの不調のように、映る人や建物が滅茶苦茶に歪んでいる。

「一体何が、ってうわ！」

直後、僕自身もその謎のノイズに襲われる。自分というスマホに正規品ではない充電ケーブルを差し込んだかのような、本来は異なるものに無理やり適合させられていくかのような感覚。これは――僕が、世界を移動する際にも感じたものだ。

どうしていいかもわからない、どうしようもない緊急事態の中、僕は身体と頭の中をぐるぐる回転させることしかできない。そんな状況が数秒続いた後、僕は突然急カーブして世界へと放り出された。

「わわわっ！」

前触れもなく空中に放り出された瞬間、無重力状態から一転して僕の身体は即座に世界の物理法則に従い始める。地球って律儀だね！

内心でニュートンさん（全然関係ない）に悪態をつきながらも、できるだけ勢いを殺しつつやたらと硬い地面の上をゴロゴロと転がっていく。……反射的に受け身を取る訓練を嫌というほどやっておいてよかった。どうやら下はアスファルトみたいだ。とりあえず地球っぽくて安心する。

「痛てて……」

起き上がりつつ自分の身体を点検する。怪我は？ない。傷にならないくらいには擦ったけれども、血は出ていない。消毒はしたほうがいいな。服も破れてないし、盾もある。

周囲を警戒しつつ状況を確認する。薄暗いけれども、明かりはある。なんだかぼんやりした緑色で、非常用みたいな感じだ。それが等間隔で並んでいる。上下左右、全部コンクリートで、明らかな人工の空間。……もしかして、ここって地下？

音は……聞こえる。少なくとも2つ以上の何かが、こちらに近づいてきている。此処がどういう場所なのかわからない以上、まずは身を隠して様子を見たいところだけど。隠れる場所なんてどこにもないなあ。はあ、とため息をついて下をもう一度見ると、等間隔で真っ直ぐ伸びている2本の鉄の線が目に入った。……これってもしかして？

――直後にさっきの物音とは反対側からやってきた光と振動と、懐かしいガタゴトプアーという車両の音。

「やっぱりそうだよねえ!」

悲鳴を上げつつ咄嗟に全力で盾を真上に投擲する。いつものバウンド目的の加減した投げ方ではなく、超人的筋力をフル稼働させた一撃は思ったとおりに天井に半ばまでめり込んでくれた。それを確認してからすぐさま盾めがけてジャンプする。盾を掴んで、コンクリートの僅かな凹凸に足の先を引っ掛けて天井にへばりつく。

「ふぅ……」

安堵のため息を吐くと、それが誰かと重なった。驚いて顔を上げると、今どきのファッションをしたティーンだろう黒人の男の子が、僕と同じく天井に張り付いたまま呆然とこちらを見つめていた。僕と違うのは、彼がどう見ても素手の指先を天井に当てただけで張り付いているということ。その蜘蛛のようなスタイルは、僕が見慣れたそれと一致して――

「スパイダーマン?」

思わず呟いた言葉に彼が目を見開く。どうやら当たりだったらしい。と思っていたら、後ろを振り返って焦りだした。そういえば、物音は複数だった!

彼の視線を追うと、現れたのはいかにも怪しいフードとマントのおそらく男。大柄な

体躯に見合った大きな鉤爪が両手に付いている。勿論作りものだ。どっちかっていうとメカメカしい。天井に張り付いた手が離れず焦る少年、駆け出す鉤爪男。僕が取るべき行動は――

「ふんっ！」

気合と共に盾を引っこ抜いて落下、身体を捻って着地する。立ち上がりざまに此方へ向かってくる鉤爪男に向かって盾を投擲する。ギィィン！と地下で反響する鈍い音。真っ直ぐ跳ね返ってきた盾をキャッチしつつ構えると。鉤爪男は驚いた様子でご自慢の爪を眺めていた。しっかりガードしたようだけど、少しだけ爪が歪んでいる。どうやらヴィヴラニウムほど頑丈じゃないらしい。

背後からドスンという落下音と、それから慌てて立ち上がる音がした。身体能力や頑丈さも向上しているのかもしれない。ますますスパイダーマンだ。

「行って！僕は心配しなくていいから」

振り返らないまま英語で叫ぶと、少しの躊躇いの後駆け出して行った。因みに鉤爪男にも伝わっているようで、わかっちゃいたけど日本じゃないことにちょっとしたショックを受ける。

「おっと。行かせないよ」

少年を追いかけようとした男を牽制する。それを見た男は一度首を鳴らして――襲

いかかってきた！
　渾身の力を込めて振り下ろされる両の鉤爪を盾で正面から受け止める。重い。どうやら鉤爪だけじゃなくほぼ全身にパワードスーツみたいなものを付けているようで、それでパワーをブーストしているようだ。けど。
「アイアンマンほどじゃない！」
　盾で下から跳ね上げて、がら空きになった胴体に蹴りを入れる。吹き飛ばされるも、男は踏ん張った。再度の突進。片手での攻撃を盾で受けると、時間差でもう1本の腕が襲ってきた。手首を掴んで受け止める。力を込めて腕をひねり上げていくと、驚いている気配が伝わってきた。どうやら自分の力が生身の人間に負けていることが信じられないようだ。
「(やっぱりアイアンマンほどじゃない。スタークさんならリパルサーで吹き飛ばされてるし、格闘技術もトレースされてるはずだ！)」
　盾で片腕をパリィして大きく拡げさせる。開いた体の内側に潜り込んで、右腕を掴んで一本背負いで投げ飛ばす！それなりに力を込めて地面に叩きつけると、大きく息を吐いて咳き込みながらゴロゴロと転がっていた。
　油断はしない。あの装甲でどれくらいダメージが軽減されるかわからなし、まだ何か隠しているギミックがあるかもしれない。盾を構えたまま横たわったまま動かない相

手を見つめていると、諦めたように急にムクリと立ち上がった。……やっぱり誘いだったらしい。僕の方をじっと眺めた後、鉤爪でお決まりの首を切る動作をし――そのまま反対側の闇に消えていった。

「……ふう」

盾を背中に背負い直して息を吐く。少し先にホームだろう明かりが見えた。取り敢えずそこに行ってみよう。

駅の改札を飛び越えて（申し訳ないけどどうしようもなかった）外に出ると、予想通りというか外れてほしかったというか、夜のアメリカンな町並みが広がっていた。僕の故郷とは似ても似つかない眺めにため息しか出ない。さてこれからどうしようかと辺りを見渡すと、さっきの少年が何かブツブツ言いながらグルグル回って歩いている。……もしかして、1人逃げ出すのが躊躇われたんだろうか。もしそうなら、彼には――ヒーローの素質がある。

「やあ、大丈夫だった？」

「え？あ、はいイヤ気にしないでなんでもないんです――ってうわぁ！」

近づいて声をかけると、少年は文字通り2ｍは『跳び上がって』驚いた。凄い身体能力だ。思わずでこれなら、ピーターにも匹敵するかもしれない。

「あ、アイツは……？大丈夫だったんですか？」
恐る恐る、という感じで聞いてくる少年。安心させるために敢えて軽く笑顔でいう。
「ああ、ちょっと戦ったら諦めたのか逃げて行ったよ。君はアレに追われてたみたいだけど、一体何があったんだい？ええと――」
そこで言いよどむ。しまった、まだ名前も聞いてなかった。
「あ、ええと、マイルス・モラレスです。貴方は？」
「僕はイズク。イズク・ミドリヤ。呼びにくかったら『デク』でもいいよ。キャプテン・デク――そうも呼ばれてる」

敵襲撃1

『セキュリティ3が突破されました。生徒の皆さんはすみやかに屋外に避難してください』

警報音とともに流れるアナウンス。周囲の上級生たちが一瞬でパニックに陥ってしまった。

『セキュリティ3ってなんですか?』

『校舎内に誰か侵入してきたってことだよ!3年間でこんなの初めてだ!!君らも早く!!』

飯田君の質問に答えるやいなや走り出す上級生。その他の生徒も皆我先にと駆け出している。逆に僕ら1年生の方がまだ冷静なくらいだ。……それでいいのかヒーロー候補生。

『飯田君、麗日さん、こっちに!』

近づいてきた飯田君と腕を組むと、心得たように頷いて麗日さんを内側に入れてくれた。僕のフィジカルで踏ん張りつつ、麗日さんが群衆に押しつぶされないように、急ぐ集団のストッパーになるようにゆっくりと進んでいく。

『あ、ありがとう……』
『委員長として、男として当然のことだ。気にしないでいい。しかし……一体何が侵入したというんだ?……って、あれは只の報道陣じゃないか!』
　窓の外を視認したらしい飯田君が叫ぶ。……報道陣?この雄英高校で?妙だ。只の報道陣に雄英のセキュリティが破れるのか?だって、さっき先輩も言ってたじゃないか。3年間でこんなこと初めてだ、って。確実に、マスコミを手引した誰かがいる。となるとこれは……陽動?
『飯田君、先生方の様子はどう?』
『……報道陣への対応で手一杯のようだ。少なくとも、こちらへくる気配や余裕はなさそうだ』
『わかった、ならまずは……2人とも、耳を塞いで』
『ああ』
『ひゃ、ひゃい!』
　スゥゥゥウ、と大きく息を吸い込む。人間が人間として持ちうる最高レベルの肉体というのは、単純な身体能力というだけじゃない。こういうことも当然できる。

『落ち着いて!!!!』

僕の出した大声にその場にいた全員がビクッ!!となって固まる。肺活量とか声帯も常人離れしている僕はこんな大声も出せるのだ。

『只のマスコミです、落ち着いて行動しましょう!』

もう1度、さっきよりは声量を抑えて叫ぶ。パニックを収めるというよりは萎縮させてしまったようだけどこの際仕方ない。

『飯田君、誘導は任せていいかな』

『ああ、任された。君はどうするんだ?』

飯田君の言葉を聞きながら、若干の余裕ができたその場でしゃがんでタメを作る。

『杞憂ならいいんだけど――確かめたいことがあるん、だっ!』

返事と同時に飛び上がり、呆然と見上げてくる生徒たちの頭上を壁を走って進む。食堂の入り口手前で降りて、そのままトップスピードで廊下を駆け抜ける。これが陽動なら、敵の狙いはおそらく職員室か校長室にある機密情報だろう。教員がマスコミ対応に駆り出されている状況を考えると、本命は職員室だろうか。ひとまずそちらに向かってみよう。

結果として、僕の予想は当たっていたのだけれど。そこにいたのは――完全な、闇。

――――――あちゃん。

吐き気がする。何度体験しても、目の前で命が喪われていく感覚は慣れるものじゃないし、慣れたくもない。

――――――やちゃん。

勿論、世界中全ての人を救えるだなんて傲慢なことは思っていない。それでも、あの感覚だけは最悪の記憶として今も僕の脳裏に焼き付いている。

――りやちゃん。

自分の腕の中で、命が崩れ去っていくあの感覚だけは。

「緑谷ちゃん！」

身体を揺すられているのを感じてようやく意識が闇から浮上する。……どうやら寝てしまっていたみたいだ。目を開けると、正面に蛙吹――梅雨ちゃんの心配そうな顔があった。距離が近くてちょっと恥ずかしい。

「大丈夫かしら？うなされてたみたいだけど」

「だ、大丈夫。ちょっと夢見が悪くて……」

気恥ずかしさから顔を逸らす麗日さんがジト目でこちらを睨んでいた。なんでさ。

「ケッ。居眠りたぁ余裕だなぁクソデク」

かっちゃんが吐き捨てるように言う。うん、これは完全に僕が悪い。バスでの移動中

とはいえ授業中に居眠りをしちゃうとは反省だ。

あの日――マスコミが学校に入り込んだ日、職員室前で黒い霧のようなものに包まれた人物を見てから、どうしても『あちらの世界』での出来事を思い出してしまってうまく寝付けないようになってしまった。ようやく眠れても、皆が崩れ去っていく夢を見てしまってすぐ飛び起きることになる。とはいえ詳しくは話せないのでクラスの皆には内容はよく覚えてないけど悪い夢を見るから最近あまり眠れてないんだ、ごめん、とだけ説明することにした。

「へぇ。緑谷でもそんなことあるんだな」

切島君が驚いたように言う。

「いや、僕は身体能力が人より高いだけの普通の無個性だからね？」

「「「「いや、普通ではない（だろ）（でしょ）（ですわ）」」」」

り、理不尽……助けを求めて梅雨ちゃんに視線を向けると、にっこりと微笑んでくれた。

「ごめんね緑谷ちゃん。私、思ったことをなんでも言っちゃうの」

ガッデム。ツユートス、お前もか。

その後話題はプロヒーローやその人気のことに移り、梅雨ちゃんの「かっちゃんは人気でなさそう」と上鳴君の「かっちゃんの性格はクソを下水で煮込んだようなもの」発

言でオチがついていた。寝起きのぼんやりとした頭でそれを聞きつつ僕が感じていたのは、夢のせいだけじゃない、言いようのない不安だった。

「――君たちの力は人を傷つけるためにあるのではない。救けるためにあるのだと心得て帰ってくださいな」

嘘の災害や事故ルーム、略してＵＳＪ（いいのかなこれ？）で、スペースヒーロー「１３号」から語られた救助訓練前のお小言は、深く考えさせられる内容だった。スタークさんやピーターならこの話を聞いてどう思っただろう。アヴェンジャーズが分裂、解散することになった「シビル・ウォー」のきっかけになったのはスタークさんが発端の「ウルトロン事件」だったし、ピーターにいたっては……僕も一緒に行動していたから、身につまされる思いだ。

なんてことを考えていると。

「一かたまりになって動くな！１３号!!生徒を守れ！」

相澤先生の大声が響く。同時に遥か下方で発生した黒い霧に僕の心臓が大きくはねる。そして、次いで闇から現れた全身に人の手を付けた男を目視したとき、時間が止まった。実際にはそんなことはなかったろう。けれど、そうとしか思えないくらいの衝

撃を僕は受けていた。

あれは、ダメだ。

理屈じゃない。しかし確信だ。あれは、今ここでなんとかしておかないと絶対にまずい――！

「……ールマイトが……るはず……」

「……象徴……いないなんて……」

敵が何かを言っているが無視して階段を飛び降りる。

「おいバカ緑谷！戻れ！」

相澤先生が戻れと言っているが止まらない。もう止まれない。いや、駆け落ちる。下まで一気に、転倒するより早く手と脚を送り込み、更に加速する！

「なんだぁ……ガキがいきがって、自殺した――」

何か言いかけた異形系の個性持ちを勢いのまま蹴り飛ばし、そのまま手男に肉薄する――！

「子どもを殺せば来るのかな？」

こちらに悪意に満ちた笑みを向ける手男に、裏拳の要領で右腕に付けた盾を叩きつけ

る。衝撃。しかし、軽い。手男の周囲に黒い霧が集まって加勢しているようだ。けれど、ダメージが通ってないわけじゃないようで、手男は盾に右手を当てたまま顔を歪めている。

「おおおぉぉぉっ！」

そのまま力を込めて強引に右腕を振り抜く。衝撃のままお互い距離を取った。盾を構え直して――違和感。オールマイトカラーの塗装が、全部剥げている？

「痛ってぇな。しかも塗装だけかよ。なんで崩れてねぇんだ？その盾」

これが、僕と死柄木弔との出会いだった。

敵襲撃2

――どういうことだ?こいつは今何をした?
頭の中が疑問でうまる。その訝しげな様子から、どうやらこの手男が何らかの〝個性〟を発動させたのは間違いないみたいだ。ただ、それは僕の盾には通用しなかったらしい。でも、それならどうして……
「つっ!!」
纏まらない思考を中断し、盾を背中に回しながら横っ飛びする。直後、僕がいた場所に何らかが一斉に着弾した。射撃系の個性持ちが複数いる。さて、どうするか。
「馬鹿野郎、緑谷!何してる!」
上から降ってきた声に視線を向けると、その身に纏わせた帯を巧みに操りながら相澤先生がこちらに向かってきていた。帯を敵に引っ掛け、動きを封じ、体勢を崩させ、見事に敵を翻弄している。
「敵の狙いも能力もわからないまま単身突っ込むなんざ不合理の極みだぞ」
敵の包囲を突破しつつ僕と合流し、背中合わせになったまま先生が言う。うん、１０

０％僕が悪いな、これは。
「すみません。あいつを見た瞬間、まずいと体中で感じて……直感で動いてしまいました」
「……まあ、今更言っても仕方ない。今は、この状況をどうにかして生き残ることだけを考えろ」
「わかりました」
言葉が終わると同時にお互い盾と帯を構える。誰かに背中をあずけて戦うこの感じ――ああ、懐かしくて、たまらない。
「たった２人で俺たちをやろうってか!?なめてんじゃねえぞ!!」
激高した敵たちが突っ込んでくる。異形型、パワー型の個性もちが接近戦を、後方から射撃型の個性もちが援護する。セオリー通りだけどその分効果的だ。厄介だったろう、相澤先生がいなかったら。
一際大柄な異形型の敵の拳を盾で防ぐ。拳から伝わる感触に困惑しているようだ。ヴィブラニウムの衝撃吸収性は、その金属的な見た目からは想像もできないほど高い。そして――パワーなら僕も負けちゃいない！
「はっ！」
受けた拳を盾で跳ね上げ、がら空きになったボディにストレートを打ち込むと、敵は

腹を抱えてその場でうずくまった。次！

相澤先生、いや、イレイザーヘッドの帯で足元を掬われて膝をついた敵の顎を蹴り上げる。これで2。イレイザーヘッドに飛んできた射撃を射線に入り込んで盾で受け、そのまま盾を投げつけて3！跳ね返りで4！

盾を回収しに走ると、敵たちがそれを阻もうとしてくる。けれど、変身型だろう敵は体を変化させることができずに困惑し、増強型の敵は突然〝力〟が消えたことによりバランスを崩してすっ転んだ。その間に盾を拾って再び構える。……あのゴーグルが、先生の個性をより効果的にしているんだ。何処に視線を向けているかわからないから、今誰の個性が消されいるのかがわからなくなる。今みたいな乱戦中だと特にだ。

しかし、少し戦ってみてもあまり手強いとは感じない。雄英の施設に直接乗り込んでくるにしては。警戒するべきはやっぱりあの手男と、黒い霧の……いない？あいつは、何処に消えた!?

「ちっ……一瞬のまばたきの隙に、一番厄介そうな奴を……！」

イレイザーヘッドの声に階段の上を見ると、黒い霧がクラスの皆を取り込むところだった。人のまばたき程度の瞬間で、あそこまで僕らに気づかれずにワープしたっていうのか？ドクターの魔術だってもう少し前兆や発動の出みたいなのがあるっていうのに！

霧がはれた時、皆の姿は綺麗サッパリ消えていた。どこかに飛ばされたか……どうする？

危険度でいえば、生徒の皆のほうが断然上だろう。けれど、ここで僕とイレイザーヘッドが２手に分かれるのは……だめだろう。１人だと多勢に無勢だし、何か想定外のアクシデントが起こったときにフォローができない。たたでさえこちらの方が戦力が少ないのに、更に戦力を分散するのは下策だ。一番良いのは、ここの敵を出来るだけ早く無力化して、どこかに飛ばされた皆を探すこと……！

「イレイザーヘッド！ここを早くむ……！」

「おっと、そこまでです」

僕の声が届く前に、目の前が一瞬で黒に包まれる。嘘だろう？いくらなんでも早すぎる……予測ができない！

「貴方は他の生徒たちより少々厄介そうなので……特別に、念入りに『高く』してあげましょう」

――――暗転。

……

……

……

闇を抜けると、そこは空中だった。突如として感じる浮遊感。僕の身体は人より頑丈になっているけれど、やっぱりこの感覚はちょっとひやっとする。スタークさん、普通の身体なのによく空を飛ぶ気になったものだ。アベンジャーズ結成のときは、生身でスターク・タワーから飛び出して空中でスーツを装着したこともあったとか。

とりとめもないことを考えていると、ようやく水面が近づいてきた。盾を背中に背負い、息を止めて身体をなるべく真っ直ぐにする。落下時間から考えると宣言通りかなり高いところから落とされたようだけど――この程度なら、僕はパラシュートなんて必要ない。

着水。

見えていたのか、音に反応したのか。予想通り早速敵が近寄ってくる。水中に適応しているらしい異形型の個性持ちだ。右腕を前に出して……水を、吸ってる？

「（ヤバっ！）」
咄嗟に背中に回していた盾を慌てて構える。直後、もの凄い衝撃で僕は一気に水中から吹き飛ばされていた。おそらく吸い込んだ水に圧をかけて一気に放出したんだろう。
「（なんて威力だ……！でも、背後が偶然船で助かった！これならこのまま船の上に上がれる）」
それなりの勢いで空中に逆戻りしたけれど、服が水を吸って重くなったせいかほんの僅か距離が足りなかった。仕方ない。さっきの攻撃で明らかに沈没寸前まで壊れてはいるけれど、ごめんなさい……ここ！
「ふっ！」

船の側面になるべく水平になるように盾を打ち込む。ヴィブラニウムと、僕の身体の頑丈さがなければできない強引な方法だ。盾と身体能力の両方を使って衝撃を抑え込む。
「ふぅ……」
右腕だけで盾にぶらさがって、どうしたものかな、なんて考えていると。左腕がそっと何かに包まれた。顔を上げるとあったのは、梅雨ちゃんの笑顔。なんだか、安心してしまった。

「オールマイトを……先生が言ってた通り、緻密に計画を練ってから実行に移したみたいだね。実際、ここにも水に適した個性持ちが集まってる。ただ、梅雨ちゃんがここに飛ばされてるってことは……」
「ケロ。ことは?」
　上着を捻って水分を絞り出しながら言う。船の上にいたのは、梅雨ちゃんと峰田君。2人の説明のおかげで、大体状況は把握できた。連中、本気だ。本気で平和の象徴、オールマイトを殺しに来てる。早くここを突破して、外部に救援を求めて……なるべく多くの人と合流しないと。
「生徒の個性までは敵は把握してない、ってことだと思う。僕が敵なら梅雨ちゃんは火災ゾーンにでも飛ばしてるよ」
「もしそうだったとしてどうするって言うんだよ! 無個性とこんなくっつくだけの戦闘向きじゃない個性じゃどうしようもねえだろうがよおぉぉぉ!」
　僕を見ながらやっぱり筋肉か……筋肉なのか……なんてぶつぶつ言ってた峰田君が自分のもぎもぎを手当たりしだいに敵に向かって放り投げる。水面に浮いたそれを、敵

たちは警戒してふれようとはしない……。やっぱり、こちらの個性は漏れてはいない。
どうする？最大のアドバンテージをどう活かす？僕たちの手札は、僕の盾と身体能力、２人の個性……盾と、個性……？傍らに置いてある盾を眺める。おそらくは手男の個性によって塗装が剥がれた、僕の盾。
「峰田君。ちょっと試してみたいことがあるんだけど……」
――船が沈むまで、あと数分。さあ、アベンジを始めよう。

敵襲撃3

「峰田君、準備はいい？」

「ああいいよもうどうにでもなれってんだよコンチクショー！」

割とやけにな声で叫びながら峰田君が頭のもぎもぎを矢継ぎ早にもいで空中に放り投げていく。さあ、いくぞ。ここからはスピード勝負だ。

「――はっ！」

まずは裏拳の要領で1個目を思いっきり弾き飛ばす。

「へぶっ!!」

そのままの勢いで下から掬い上げるように2個目を。身体を捻り、回り、時には飛び上がったりしながら、次から次へともぎもぎを敵を向けて弾き飛ばしていく。もぎもぎ自体に危険性はないと敵が認識するまでにどれだけ命中させられるかが勝負だ。

「ひでぶっ!!」

「あべしっ!!」

……変な悲鳴を上げながら敵たちが意識を失っていく。どうやらいくらある程度の弾力がある峰田君のもぎもぎとはいえ、僕の力で弾き飛ばせば、この距離があってもそれなりの威力になったらしい。予想外だけど好都合だ。僕に広範囲の水を吹き飛ばせるパワーでもない以上、過剰なもぎもぎが水面に広がってしまうことは僕にもひっついてしまう危険性が出てくる。

「クソが、なめやがって!」

ひたすら無心で敵を狙撃していると、ついに1人が水を噴射してもぎもぎを防いだ。そしてそのまま水中に消える。予想通り、水中から再び船自体を攻撃してすぐに沈めるつもりか。

「梅雨ちゃん、頼んだ!」

「ケロ。任せて」

予めしていた打ち合わせどおりに、梅雨ちゃんと同時に空中に飛び出す。梅雨ちゃんが僕の胴に舌を巻きつけながら着水して敵を追い、僕はその間に伏兵がいないか水中を警戒する。……もしかしたらと思っていたけど、どうやら本当にいないらしい。わざわざ雄英に入り込んで下調べ、準備をするくらいの計画だっていうのに、変なところで詰めが甘い。なんというか、チグハグな印象を受ける。

「緑谷ちゃん。いくわよ！」

っと。思考を中断して、梅雨ちゃに向けて頷く。梅雨ちゃんの蛙ならではの泳ぐ力、舌で掴んで振り回される遠心力、それに若干の僕自身の泳ぐ力が合わさって――見事な捻りも加わって、盾を先頭にかまえた人間、いや、超人砲弾になって僕が発射された。敵が驚く気配がするけど、もう遅い。組み付いてしまえば、僕なら水中でも対処できる！

こうして、水難ゾーンでの僕たちの戦いは終了した。

「……ケロ。これからどうするの？」

3人揃って水から久しぶりに上がりながら梅雨ちゃんが言う。周囲の情報が不確かなこの状況でどうするか、悩みどころだ。

「僕は相澤先生に加勢に行くよ。2人は……僕としては、このまま目立たないように隠れつつ、外を目指してほしい。誰か1人でも外部に救援を求めるのが成功した時点で状況はずっとよくなる」

「おいおいおいおいおい！それって俺たちだけで行動しろってか!?敵だらけでどこで鉢合わすかわからないこの状況で!?ふざけんなよ勘弁しろよついてきてくれよなぁ!?」

「……」

峰田君が泣きながら僕にしがみつく。梅雨ちゃんは何も言わないけれど、よく見ると

体が震えている。無理もない。いくら雄英高校の生徒、ヒーローの卵といえど２人はまだ実戦経験もない子どもなんだ。

「……なら、ここにいて。伏兵はいなかったし、水難ゾーンのさっきの敵たちが突破されたって情報がまだ漏れてないなら、梅雨ちゃんの水中での機動力があれば暫くは安全なはずだ。ただ、状況の把握と気絶させただけの敵が目覚めたときのためになるべく水際に」

服から水を絞りながら言う。何度も同じことをしていやになるけど、このままだと重いし体温が奪われていく一方だからやらないよりはましだろう。何より、実戦では服１枚が生死をわけることなんて珍しくもない。

「……わかったわ。気をつけて」

「緑谷ぁ！死ぬんじゃねぇぞぉ！絶対だ、絶対だぞ！」

不安そうな２人の声。背負った盾を、左腕につけて、軽く掲げる。

「――心配ないさ。僕は、キャプテンだ！」

――走る。全速力で走る。

腕を振り、全身の力を振り絞って一瞬でトップスピードに到達する。総合的には疲れ

知らずの自動車には及ばないが、瞬間最高速なら公道を走る一般車を凌駕する。僕があちらの世界に飛ばされる少し前、ブラックパンサーとウィンター・ソルジャー、キャプテン・アメリカによる追いかけっこが真っ昼間の公道で展開されたことがあったらしい。全身金属スーツと、金属盾持ちと、片腕金属の大男たちによる超スピードのデッドレース。もし一般人が跳ねられていたら人同士とはいえ酷いことになっていただろう。つまり何が言いたいのかっていうと――

「動き回るのでわかり辛いけど、髪が下がる瞬間が――がっ！」

これくらいの距離なら、手男の左手に掴まれてた相澤先生の肘が壊される前に割り込めるってことだ！

トップスピードのまま飛び上がって顔面を狙った蹴りは、直前で身を捻られて肩にかすっただけだけど、先生を自由にするには十分だったらしい。たたらを踏んで後ずさる手男。油断なく盾を構える。

「大丈夫ですか、イレイザーヘッド」

「ああもうお前は本当に……！さっきから邪魔なんだよお前!?」

激高してその手を振るう手男。その掌を正面から盾で受け止める。今度は逃さないとばかりギリギリと押さえつけてニヤリと笑う。が、その表情が苛立ちに変わるまでそうはかからなかった。やはり、この男の個性も僕の盾には効いていない！

『そのもぎもぎ、僕の盾につけてみてくれないかな。……一応、端っこの方に』
『は？そんなことしたら折角の盾が……』
『いいから。多分、いや、きっと大丈夫だと思う』

結果として、盾にもぎもぎはひっつかなかった。峰田君は驚いていたけれど、僕の中ではある仮説が浮かんでいた。ヴィブラニウムは金属だ。単一の原子のみで構成されている物質。つまり、混じりっけなしの純粋な、異世界の物質。物質に直接影響を与える個性は、影響を与えることはできないんじゃないだろうか。
「ちっ、本当に鬱陶しい……まあいい。本命は、俺じゃない」
「緑谷！下がれ！」
背後から先生の声。同時に、真横から圧倒的な気配。反射的に盾を掲げると、重い拳が遠慮なく突き刺さった。ヴィブラニウムの衝撃吸収性能のおかげで受けた手首は無事でも、衝撃全体は受け流せないほどだ。踏ん張っている足元の地面が割れ、そのまま力づくで押し戻される。距離をとって見えたのは、脳が丸見えになっている、全身真っ黒、傷だらけの大男。
「対平和の象徴、改人〝脳無〟。オールマイトを殺すための特注品だ。個性を消す？増

強型の身体能力？素敵だけど関係ないね。圧倒的な力の前にはつまりただの〝無個性〟だもの」

手男が嘲るように語る。自らの勝利を確信した、弱者をいたぶるための、悪意に満ちた笑み。

「緑谷、怪我はないか!?」

残りの敵たちを制圧したイレイザーヘッドが駆け寄って僕の横に並ぶ。個性は……発動、してるんだろうな。

「無傷です。イレイザーヘッド、やはりあれは……」

「さっきから個性は発動してる。効いてないようだがな」

やっぱりか。となると、先生ではあの脳無とやらの相手は難しい。1対1になった今なら、発動型の個性らしい手男の方が相性がいいはずだ。なら、僕のやるべきことは……応援が来るまで、あの改人を引き受け続けること。万が一にも、他の生徒のところへ行かせてはいけない。

――思い出せ、あの自信に満ちた、嫌う人も多く、でも何故か憎めないあの人を。

構えをといて、1つ息を吐く。そして拍手だ。ゆっくり大きく。しっかりと聞こえるように。

「……あ？なんだ、絶望のあまり気でも狂ったか？」
　手男が訝しげに言う。言葉には出さないが先生もそんな目で僕を見ていた。さあ、緑谷出久、一世一代の演技の始まりだ。
「いや？実に感動的な話だったよ。素晴らしく有意義な意見だった。子守唄には最適だ」
「……あァっ!?」
　手男が僕を睨みつける。そうだ、それでいい。
「あ、怒った？ごめんね、そんなつもりはなかったんだ。ほら、ゆっくり深呼吸して……カルシウムのサプリメント飲んでから、あっちで横になってるといい。２時間たったら起こしてあげるからさ、檻の中でね」
「もういい。脳無、バラバラに引きちぎってやれ」
　手男の指示と同時に一瞬で距離を詰めてくる脳無。雑に振るわれたその拳を、今度は余裕を持って盾を掲げて受け止める。
「それから１つ訂正だ。僕は増強型の個性じゃない、無個性だよ。それと、圧倒的な力？僕に受け止められてる程度じゃまだまだだね。……せめて、ハルクくらいになってから出直してこい！」
　――さあ、今こそ示せ。誰も傷つけさせないという盾の意思を。命を賭してヒーロー

であった、鉄の遺志を。

インタビュー・ウィズ・キャプテン・デク

『やあボーイ。今日も元気にヒーローしてるか？』
日中は常時耳に付けている通信機から陽気な声が流れてくる。随分とご機嫌なようだ。まあ、今日は美女と仕事だとかなんとか言ってた気がするからそのせいだろう。
「調子は悪くないですよスタークさん。今は子どもと握手してます」
道路に飛び出して車に轢かれそうになっていた男の子の背中を軽く叩いて母親の元へ送り出してやる。お母さんは涙を流しながら我が子を抱きしめていた。
「お母さん！もうお子さんから目を離しちゃダメですよ！……それで、緊急事態ですか？確か今日は美女のインタビューとか言ってましたし」
『確かにその通りだが……なんでそこで美女云々が出てくるんだ？』
「そりゃ、緊急事態でもなきゃ貴方が美女より僕への連絡を優先するなんてありえないでしょ」
軽口を言いつつバイクに跨る。特注してもらった、ロジャースさんが使っていたもの

と同じタイプのバイクだ。
「それはその通りだが……僕への敬意が足りない気がするぞ？まあいい、フライデー、説明してやれ」
『はい。デク様、お久しぶりです。本日未明、脱獄事件が発生していたことが判明しました。現在も逃走中の脱獄犯は、イーヴォ・ザイドラー。元ヒドラの幹部だった男です』
「やあ、久しぶりだねフライデー。ヒドラ、ね」
　ヒドラ。それは僕にとって体験するのは初めてであると同時に、縁深い言葉でもある。キャプテンの名を冠する僕にとっては。
『ザイドラーは部下を使って、ニューヨークの2箇所のビルに人質を取って立て籠もらせています』
「要求はもしかしてお仲間の釈放、とか？」
『ご明察です、デク様』
「月並みな要求を言ってみただけだよ。でもありがとうフライデー」
『どういたしまして』
『おい、僕と話してるときとなんだか対応が違うのは気のせいか？兎も角、僕はザイドラーを追う。片方には蜘蛛の坊やを向かわせるから、もう片方に向かってくれ。初めての本格的な事件への単独行動だ……いけるか？』

「了解！」
　勢いよく返事をしてエンジンをかける。今まではピーターみたいに自主的に、自警団のような一般の犯罪者相手の活動だけだった。ヒドラのような本格的な敵組織は初めてだ。気を引き締めつつニューヨークの道を走り出した。

　――ニューヨーク某所。
「フライデー。隣のビルから飛び移れそうな場所とか、外から入れそうな通気孔とかある？」
『少々お待ちください……北側の３Ｆに内部に通じる通気孔があるようです』
「了解、侵入したらナビゲート頼めるかな」
『かしこまりました』
　現場のビルから少し離れた場所にバイクを止めてから走る。駐車禁止は……検挙されないように祈っておこう。緊急事態だし、ごめんなさい。
『へえ、考えたな。キャ……あー、彼なら正面から乗り込んでるところだ』
　フライデーが教えてくれたビルの北側に向かって走っていると、スタークさんが感心したといった様子で声を掛けてくる。
「僕が『彼』ほど知られていれば敵も警戒してこちらに注意を引けたかもしれませんが

……そうではないですし。それに、マスクを被っててもアジア系だからかなんとなく『幼い』って思われることが多くて。なめられて激昂させちゃったらまずいです、からっ！」

目的の通気孔を発見。周囲に見張りがいないのを確認してから、1階の窓に足をかけて一気に飛び上がる。逆の足を2階の窓にかけて再び飛んで、右手を通気口の縁に引っ掛けた。そのまま腕1本で体を持ち上げて、左手で無理やり蓋を外すとそのまま中に体を滑り込ませる。

「それに、正面からいって無理やり制圧できても、ビル自体の被害が酷くなりそうでしょ。こっちのほうが幾らかマシです。この前ピーターに、通れそうな通気孔の見分け方とか、進み方とか教えてもらいましたし」

フライデーのナビゲートに従いながら通気孔を這って進む。狭い場所をくぐり抜け、配管を避けながら外に出ることなく下の階に降りていく。ピーターにいきなり連れ出された時は勘弁してくれと思ったけど、人生何が役立つかわからないものだ。慣れていないと通るだけでも時間がかかったかもしれない。

『ヒーローというよりは泥棒か敵みたいじゃないか?それは』

「言わないでください、自覚はあるんですから……ここか」

通気孔の蓋の格子越しに立て籠もり犯たちを見下ろして確認する。1、2、3……4

……内部に4人。フライデーによると、ビルの外にも人質を1人ずつ連れて警察に要求を告げているのが3人いるらしい。

『気をつけろよ。今確認したボスのトレーラーの中にはエイリアン製の武器がギッシリだ。まず間違いなく部下も同じ物を持ってるだろう』

エイリアン製。以前ピーターが止めたっていう、チタウリってやつらが使ってた武器とかのことだろうか。確かに、見たことがないような形の銃を持っている。

「その武器、僕の盾より強いんですか?」

左腕に付けた盾を撫でながら聞く。僕の盾。昔、スタークさんの父親ハワード・スターク氏が合金で作ったキャプテン・アメリカを象徴する盾ではなく、ワカンダの技術を用いて作られた、純ヴィブラニウム製の僕だけの盾だ。その衝撃吸収性はキャプテンのそれをも上回る。

『そりゃあり得ないだろう。だが、油断するなよ』

銃を持った男が動く。人質たちを睨みつけながら周囲を回って……3、2、1、今!

「わかり、ました――行きます!」

ありったけの力と、全体重をかけて格子状の蓋を思いっきり踏み抜く!

「ぐはっ!!」

「な、なん――!?」

ドンピシャだ。着地した僕の下で潰れたカエルのようになった男が悲鳴を上げて沈黙する。突然の出来事に混乱している男に向かって盾を投げる。気絶。跳ね返ってきた盾をキャッチしてそのまま構え、ようやく銃を撃ってきたところを反射する。足に命中。うずくまったところを盾で払って3人目。振り向きざまに最後の1人にむかって盾を投げる。……ふう、なんとかなったみたいだ。

混乱しながらも自分たちが助かったことを徐々に理解して歓声を上げようとする人質たちに向けて、人差し指を立てて鼻と口に当てる。

「静かに。今から、外の残りを片付けてくるから。すぐに済むよ、落ち着いて」

「あ、ありがとう。それで、ええと、君は一体……」

これだけ大きな事件だ。もしかしたらこれは、僕という存在が多くの人に知られるきっかけなのかもしれない。そう考えると。

「僕は――」

「さあよく見てろ!!ヒドラを侮るとどうなるか――グァッ!!?」

要求に応じない警察に業を煮やして人質に突きつけられた銃が何かに叩き落される。

「クソッ!!一体何なんだ!!?」

「……ヒドラも落ちるところまで落ちたんだな。僕が聞いた７０年前の話より、卑劣で姑息だ」

振り返るとそこにいたのは、合衆国民なら誰もが知るヒーロー……によく似た姿をした男だった。声からしてまだ若い、いや、幼いと言ってもいいだろう。決定的に違うのは、跳ね返ってきたところをキャッチした盾だった。キャプテン・アメリカのそれとは、全く異なる見た目をしている。

「てめぇ、なにもん、だ……」

そこまで言いかけて気づく。仲間が、全員倒れ伏している。いつの間に――!?

「ガッ!!」

次の瞬間には、衝撃と暗闇。薄れゆく意識の中で最後に聞いたのは。

「――Ｉ　ａｍ　，　ｃａｐｔａｉｎ　ｄｅｋｕ」

塀の中に連れて行かれる男が知るよしもない、１夜にしてアメリカ全土に広がることになる台詞だった。

「……ふう」

僕を遠巻きに眺めている市民の皆にはわからないよう、そっと息を吐く。内心はかな

り緊張していたけれど、見栄を張るのもヒーローの仕事の1つだ。
『あー、ボーイ。ちょっといいか？』
ん？スタークさん？さっき敵のボスを捕まえるって言ってたけど、何かあったんだろうか。
『別に手こずってるわけじゃないんだが、やっこさんがどうやらハルクの親戚か何かだったらしくてね。ちょっと肉体派の人は手伝ってもらえないかな？いや、別に僕1人でもどうにかなるんだけどちょーっと面倒だからね』
「……了解。すぐに向かいます」
もう1度ため息を吐きつつ盾を背負って駆け出す。最後に、振り返って軽く手を振っておいた。
ちなみに、駐車違反は大丈夫だった。

バイクで走っていると、途中で空中に見慣れた姿を発見する。まるで重力などないかのように楽しげに空中を舞う赤い姿。僕の親友だ。向こうも僕を見つけたのか、スイングの位置を低くして近づいてくる。

「――やあデク！」

「そっちも終わったの？」

「僕の方は！」

「怪我人も出なかったよ！」

スイングで一番下に来る度に話しかけてくるから跡切れ跡切れだ。正直、ちょっと面倒くさい。けれども、お陰で浮ついていた心が落ち着いてきた。前方に横転したトレーラーを確認する。

「うん、こっちも同じだよ。スタークさんは……あれだね」

薬か何かでも使ったのか、明らかに常人を超えた体躯の筋肉モリモリマッチョマンの変態が空を飛ぶアイアンマンに手当たり次第にそこらのものを拾って投げつけている。スタークさんは……周囲に被害を出さないことに専念してるみたいだ。アイアンマン・スーツには捕獲用のギミックも色々搭載されているらしいけど、基本が火力に振った兵器が多いのでタフな生身に暴れられると確かに困るだろう。

「ピーター、僕が下から行く。君は先に上から頼むよ」

「了解！」

返事と同時にピーターが先行し、空に向かって投げつけているトレーラーの破片をウェブでキャッチ、そのまま顔面にぶち当てた。怯んでよろめく大男。僕の役目は――ここ！

バイクをドリフトさせながらジャンプして、パルクールの要領でトレーラーを飛び越える。受け身を取りつつ転がりながら、よろめく男の膝に思いっきり盾を打ち付けた。悲鳴を上げる大男。怒りに任せて拳を振り下ろしてくるけれど、膝立ちで盾を構えて受け止める。その直後に、背後からアイアンマンのリパルサーの1撃が直撃して――最後に、スパイダーマンの代名詞、ウェブでぐるぐる巻にされて捕獲完了だ。

「は、ははは……俺がいない間に、ハロウインの日付が変わっちまったらしい。こんなコスプレ野郎どもにやられるとはな……なんなんだよお前等は」

「よく覚えておけ。僕たちは――アベンジャーズだ」

これが、僕とピーターの、アベンジャーズとしての初仕事だった。そしてその場を去る前に、スタークさんのインタビューをしていたひとたちに僕たちも質問されてしまった。キャプテンとの関係は濁したけれど――

『ヒーローになって良かったと思うことは？』

『……力を貰う前は、自分の身すら守ることができませんでした。力を持っている人を羨んでいました。でも、本質はそこじゃないんです。誰かが助けを求める顔をしていた時、僕は体が勝手に動いているでしょう。力の有る無しは結果にすぎない。だから――』

この言葉が、多くの嘗ての僕に届きますように。

『皆、諦めないで。誰かを救おうとする君は、誰よりもヒーローなんだから』

敵襲撃４

――常人１０人分はあろうかという威力の拳を盾をかかげて受ける。
受ける。躱す。また受ける。逸らす、躱すいなす受けるまた躱す。反射神経と身体能力を総動員して脳無の攻撃を捌き続ける。今の所僕は無傷だ。確かに身体能力は凄い。僕以上かもしれないし、オールマイトに匹敵するのかもしれないが――それだけじゃ、僕の守りは崩せない。
「ふっ！」
大振りな右の打ち下ろしを躱して、左手の盾を顎に思いっきり打ち付ける。違和感。結構な力を込めて打ち込んだのに、反動が殆どない。これは……
「無駄だよ、『ショック吸収』だからな。オールマイトの本気にも耐えられるように調整してある」
素の力でこれ……その上でショック吸収か。厄介だな。ただ、それならそれでやりようはある！
右拳を地面に付いたまま、左手で殴ろうとしてくる脳無。確かに速いし、強い。まと

もにくらったらひとたまりもないだろう。けれど、荒い！

迫ってくる拳をしゃがんで躱し、両腕で抱え込むように極太の腕をしっかり捉える。そのまま勢いをつけて股の間に滑り込んだ。背後に出ながら、力と体重をかけて全力で肘を極める。バチン！と嫌な音がしたのを聴くと同時に慌てて跳んで転がり避ける。一瞬前まで僕の頭があったところを、猛スピードで脳無の足が通り過ぎていった。危なかったけれど――これで、左腕は潰した。

サノスは強かった。圧倒的なパワーだけじゃなく、実戦で、戦場で磨かれた確かな戦闘技術があった。この脳無とやらにはそれがない。本能のままに暴れているというよりは……気のせいだろうか、一見して自我が存在しないような容姿と振る舞いなのに、その動きにどこか素人っぽさを感じる。と、そんなことを考えつつ、左腕が捻れたまま暴れまわる脳無の攻撃を捌き続けていると、端から大声が聞こえた。

「あああああああっ!!!ほんっっっとうになんなんだよお前!!お前みたいなのがいるなんて聞いてないぞさっさとやられちまえよ!!!なんだよぉおもおおお!!!」

イレイザーヘッドを相手取りながら、ガリガリと頭を掻きむしりつつ手男が絶叫する。好都合だ。そのまま苛ついて、僕らに集中してくれればいい。根比べなら負けないし、必ず応援が来る。

「なんだ、まだ眠れてなかったのかい。君って枕が変わると眠れないタイプ？それともママかパパが横にいないとだめなのかな。迎えに来てもらってお家でおねんねするかい？」

「――ぶっ殺す。脳無、もう治っただろう？さっさとそいつを殺せ」

何かが逆鱗に触れたのか、スッと冷たくなった瞳で僕を睨みつけてくる。イレイザーヘッドがやりすぎだ馬鹿という視線を送ってきていた。あのトニー・スターク直伝、且つピーターの軽口の影響を存分に受けた僕の挑発はどうやら効きすぎてしまったらしい。それにしても、もう治っただろう、だって？

嫌な予感を覚えつつ脳無の方を見ると、折角壊したはずの左肘が、べこべことかいう音を立てつつ綺麗に戻りつつあった。おいおいまじか。

「ちっ……悪い、緑谷。なるべく妨害はしてたんだが、かなりの修復速度だ。少しの間視線を逸しただけで完全に回復された。意味がないとは言わんが、俺の個性で治癒を妨げるのは非合理的だな」

どうやらイレイザーヘッドはとっくに気づいていて、僕の知らぬ間にアシストまでしてくれていたらしい。……まだまだだな、僕も。そんな僕を見て手男がにやにや笑った。

「『超再生』……腕がもげようが足がちぎれようが、体が半分になろうがすぐに元通りだ。

お前らの半端な攻撃なんか無意味なんだよ」
　さてどうしたものか。僕の体力も無限じゃない、どうにかして脳無を無力化する方法を考えないと、と思っていたら手男の後ろに黒い靄が発生した。――僕をスカイダイビングさせてくれたアイツだ。ここで増援は……ちょっとまずい。
「黒霧。１３号はやったのか」
「行動不能にはできたものの、散らし損ねた生徒がおりまして……１名逃げられました」
　イレイザーヘッドと視線を交わす。誰かはわからないが、これで外部に危機は伝わったはずだ。そう遠くないうちに応援が来る。だというのに、手男――死柄木弔は不気味な笑みを浮かべたままだった。
「ああ、なんでかな、黒霧。ゲームオーバーだよ。さすがに何十人のプロ相手じゃ敵わない。引くしかない。俺たちは、平和の象徴を、オールマイトを殺しに来たはずなのにさ、なんでかな――」
　敵が、嗤う。
「――そんなことより、今すぐ目の前のこいつを壊してやりたくて仕方ないんだ」
　未熟で、巨悪と言うには程遠い。けれども、間違いなくこの世界で最も醜悪な敵が発芽した瞬間だった。
「行け、脳無。――押さえろ」

死柄木の言葉と同時に脳無が文字通り「飛び上がって」襲いかかってくる。攻撃するというよりは、押さえろという命令通り捉えるための動きだ。しかも、さっきまでより速い！

「くっ！」

死柄木と黒霧を警戒しつつ、動き回って兎に角避ける。雑に殴ってくるだけならいくらでもやりようはあった。けれども今度は、ただ僕の動きを止められればそれでいいというように、体全体でのしかかるように迫ってくる。明らかに事前に想定された動き。何かある——捕まったらまずい！

避ける。避ける。走る、避ける、転がる。少しずつ速さを増しているようにも感じる脳無のチャージを避け続ける。まだ十数秒しか経っていないだろうに、一気に危機的状況になってしまった。そしてその状況を黙って見つめている死柄木と黒霧が返って不気味に感じる。

このままではジリ貧だ。それに恐らく——

「イレイザーヘッド！」

「緑谷！馬鹿野郎、この……」

僕より先に体力が尽きてよろめいた相澤先生を突き飛ばす。無理もない、むしろ個性の効果もなしにここまでよく動いて——がっ、ぐっ……

体の前に盾を割り込ませて空間を作る。完璧に抑え込まれたら、体格差を考えると脱出は絶望的だ。関節を極めにくるような知恵はなさそうなのは助かるけど気休めでしかない。

「詰みだな。黒霧――やれ」

次の瞬間、下半身だけが浮遊する感覚に襲われる。見ると、腰から下が黒い靄に飲まれていた。

「がっ――」

踏ん張りが効かなくなったせいで頭を掴まれ地面に押さえつけられる。これは――ちょっと、まずい、かな……

「そのワープゲート。途中で閉じるとどうなるかなあぁあ？楽しみだろう？」

死柄木が、まるで『悪』を体現したかのような顔でニヤニヤと嗤う。思い浮かんだのは、ウォンさんが開いたゲートと、ちぎれるサノスの部下の腕。そして――最後までらしくあった、鉄の男。だから僕も、精一杯の言葉を返すことにした。

「ああ、まったくだね。できれば下はスミソニアン博物館に飾ってくれると嬉しいかな。肉体美には自身があるんだ――ほら、いかにもアメリカのケツって感じだろ？」

僕の答えに、死柄木がつまらなそうな顔をする。

「……ふん、まあいい。黒霧、や――」

――――その瞬間。

衝撃。そして、轟音。弾け飛ぶ扉から現れたのは、平和の象徴。

「もう大丈夫……私が来た！」

What is hero?

「……やはり衰えた。全盛期なら、５発も撃てば充分だったろうに。２００発以上も撃ってしまったよ」

舞い上がる土埃のなか、平和の象徴が拳を掲げてニヤリと笑う。僕らが苦戦したあの暴力の塊、脳無を真正面からの撃ち合いでねじ伏せてしまった。とはいえ、衰えたというのは本当のはずだ。口の端からは血が溢れている。そして、残されているであろう時間もそう多くはないはず。それを知っているのは、この場では僕だけだろう。

この状況で、最も警戒しなければいけないのは、黒霧という男。僕の体を切断するつもりでいたあの方法で、生徒の誰かを人質に取られてしまうのが一番まずい。幸い、弱点はかっちゃんが暴いてくれた。もう、不覚は取らない。さあ、どう出る敵。

「凄いな。チートだよ……チート。脳無を殴り合いで吹き飛ばしやがった……あーあ、今度こそゲームオーバーだな」

死柄木がガリガリと顔を掻きながら言う。内容こそ不満気だが、その顔は――とても楽しそうに、歪んでいた。

「帰ろっか、黒霧」
「……よろしいのですか？」
黒霧が以外そうに問いかける。油断はしないけれども、僕からも死柄木はどこか気が抜けているように見えた。
「ああ、オールマイトは今はいい。それよりも、俺は――アイツを、殺したくてたまらない」
死柄木がそう言うと、黒霧も、オールマイトも、かっちゃんたちも。その場の全ての視線が、僕に集まった。
「いや、違うな。ただ殺したいわけじゃない。皆の前で、アイツを這いつくばらせて、心をへし折って、痛めつけて嬲って遊んで――アイツを、壊したいんだ」
……笑えない。いや、洒落じゃないし、死柄木が本気だということもわかっているけれども。心の奥底で、僕自身が納得してしまっていることが笑えない。どこかでわかっているんだ。僕も、死柄木と僕は、相容れない存在だということが。
そのまま素直に黒霧のワープゲートに入っていく死柄木。その姿が完全に闇の中に消える直前、唐突にまた口を開いた。
「お前、無個性なんだってな。……名前は？」
「……緑谷出久。いや――」

反射的に答えて、言い直す。僕はヒーローなんだという意思を込めて。
「僕は、キャプテン・デクだ」

「――そうか。ヒーローに、なれるといいな?」

「――雄英体育祭が迫ってる!」
「クソ学校っぽいのきたあああ!!」

クラスの皆の盛り上がりをどこか遠く聞きながら考えるのは、死柄木の最後の言葉だ。

『――そうか。ヒーローに、なれるといいな?』

あれは、どういう意味だったのだろう。皮肉なのは間違いないだろう。けれど、その

真意は？

無個性がヒーローになれるわけがないということか。ヒーローになる前に僕を殺したり、はたまた雄英高校自体に何かをしかけるという意味か。……そもそも、ヒーローになるってなんなんだろうか。

「――ク君！デク君！もうお昼やよ？大丈夫？」

「あ、ああ。うん、ありがとう。行こうか」

かけられた声に我に返ると、麗日さんが心配そうな表情で僕の顔を覗き込んでいた。授業も上の空で聞き流しちゃったみたいだし、女の子にこんな顔させるなんてヒーロー失格だな。反省。

「なんでもないよ、ありがとう。早く行かないといっぱいになっちゃうね。飯田君も行こう！」

食堂へ向かって3人で歩く途中、ふと気になって麗日さんがヒーローになりたい理由を聞いてみた。返ってきた答えは――

「お金？」

「究極的に言えば……なんかごめんね不純で。飯田君とか立派な動機なのに私恥ずかしい……」

「何故!?生活の為に目標を掲げることのどこが立派じゃないんだ？」

飯田君が変な動きをしながら言う。その通りだ。それに、よくよく聞くと麗日さんのご両親も良い人だった。決して金銭欲だけからじゃない。それに――

「私は絶対ヒーローになってお金稼いで、父ちゃん母ちゃんに楽させたげるんだ」

真剣な表情でそう語る麗日さんは、間違いなく家族にとっての「ヒーロー」なんだろう。

それじゃあ、僕は。何の為にここにいる？資格を取るため？無個性なのに？

……ヒーローって、何だっけ。

『悪いことが起こると見過ごせないんだ』

あの時のキャップは、どんな気持ちだったんだろう。

「緑谷少年がいた!!ごはん……一緒に食べよ？」

「オールマイト先生」

この人には、何が見えているんだろうか。

「ハイ、お茶」

「ありがとうございます」
　Ｎｏ．１ヒーローが手ずから淹れてくれた貴重なお茶を一口。うん、少し、落ち着いた。
「さて、緑谷少年。まずはありがとう。あの時機転を利かせてくれたおかげで、皆に怪しまれずにすんだよ」
　ＵＳＪの時のことだ。『先生！あそこの遥か上空に監視してる敵がいます！』なんて我ながら大雑把な誤魔化し方だとは思うけれども、あの状況で突っ込む人はいなかった。
「いえ、お気になさらず。……やっぱり、制限時間が短く？」
「ああ、１時間１５分前後ってところかな？マッスルフォーム自体はまだ2時間くらいはいけるんだけどね。……ぶっちゃけ私が平和の象徴として立っていられる時間って、実はそんなに長くない」
　以前聞いたとおり、オールマイトの力は少しずつ、けれど確実に衰えてきている。そして、それに気づいているのは『こちら側』だけじゃない。
「奴らも、気づいてましたよね」
「ああ。だからこそ、君に『私』と『力』を継いでもらいたんだけどね」
　そう言って苦笑いする。流石に申し訳ない気持ちになった。

「優柔不断ですみません」
「いいさ、悩める若者を導くのは先達の役目だ。今も、何か悩んでるんだろう?」
……驚いた。実はこの人、以外に教育者に向いているのかもしれない。
ポツリ、ポツリと話し出す。ヒーローとは何なのか。その在り方。ヒーローを目指す理由。僕は、何のためにここにいるのか。本当にヒーローとして在るのならば、今この瞬間も動いていなければならいんじゃないのか。
一通り話終えると、オールマイトはふむ、と顎を撫でてこう言った。
「確かに、君の言うことにも一理はある。けれど、それじゃあ『安心』は与えられないぜ?」
「安心……?」
ああ、とオールマイトが頷いて一瞬でマッスルフォームになる。正直心臓に悪い。威圧感と画風が凄い。
『私が来た!!』……ってのは、私を象徴する言葉でもあり、要救助者に安心感を与える言葉でもあるんだ。その安心を与えられるのは、私が積み重ねてきた実績と信頼があるからだ」
確かに、その通りだ。その台詞が聞こえただけで、もう安全だと確信してしまえるほどに。

「緑谷少年。君には、今すぐにでも実戦で通用する実力と、経験もあるんだろう。……何があったのかは聞かないけどね。けれど、今の君は何の実績もないヒーローの卵だ。そんな頃から『外れた』振る舞いをしていたら、信頼なんか得られない。事件を解決することはできても、人々に安心は与えられない」

「それは……」

「逆に言えば、確かな実力さえ真っ当な方法で示してしまえば、多少の無茶は効くかもしれない。実際私がそうだ。ちょくちょく特例を許してもらっているしね。そして、それにうってつけの舞台がもうすぐあるじゃないか!!」

雄英体育祭。

バッ!!とオールマイトが大きく両手を広げて叫ぶ。

「真っ当な方法で!!しかし圧倒的な実力を示して魅せろ、緑谷少年!!世界に『君が来た!!』ってことをね!!」

インフィニティ・ウォー０

――２０１８年。

ハロー、２年前の僕、聞こえますか。今僕はアメリカ、ニューヨークにいます。……異世界の。

おい、なんだ！何があった!?

キャプテンだ、キャプテン・アメリカだ！

「光栄だけど、ちょっと違うよ、っと!!」

思いっきり助走をつけて、ウイングボディのトラックの上にいる強盗に向かって飛び上がる。そのまま両足を突き出してドロップキック。吹っ飛ぶ貴金属店強盗。屋根に着地。

周囲を見渡すと、丁度こちらへ銃口を向けている男と目が合った。直後に連射される弾丸を盾を構えて防ぐ。その盾を見て、強盗が悪態をついた。

「くそ、このイエロー・キャップが!!」
「……フッ!!」
若干複雑な気持ちになりつつ、リロードの瞬間を狙って盾を下に向かって投擲する。男の手前でワンバウンドした後に顎を跳ね上げて、放物線を描いて戻ってくる。――キャッチ。背中に背負う。最後の1人は――今、飛んできたウェブで僕が乗っているトラックの側面に貼り付けられた。同時に僕の真横に音もなく着地する全身赤タイツ。僕の親友だ。
「やあデク！あっさり片付いたね。やっぱり僕たちって息ピッタリ！後で一緒に写真撮って呟かない？ヤング・アベンジャーズってタグ付けてさ！ほらやっぱり若者だからこそできることっていうのがあると思うんだよね、それこそ――」
合流した直後によくもまあこれだけ喋ること思いつくな……正直凄い。僕には逆立ちしたってできそうにない。
「はいはい、呟くのはまた今度ね。今は任務に集中しないと。――カレン、内部のスキャンは終わった？」
「はい、デク様。2階に階段と人質を見張っている2人。3階に宝石などを回収している3人がいます」
スタークさんが開発した僕たち付きの人工知能、カレンが直ぐに返事をしてくれた。

ワカンダの科学技術は諸外国とは段違いだけれども、そのワカンダやヒドラの技術に殆ど頼らずにあれこれ開発しているスタークさんはやっぱり天才なんだなってこういう時よく思う。

「ＯＫ、スキャンしたデータをピーターに送って。ピーター、どう？」

「……２階のが２人かたまってる。そっちの方任せていいかな？３階は僕が行くよ」

「了解、ウェブで運んでくれる？」「ＯＫ！任せて！」

言うが早いが両手首からウェブを飛ばして屋上付近に貼り付ける。そのままちょっと体を引いて、パチンコの要領で飛び出していくピーター。僕も超人兵士としての身体能力と、キャプテンの指導もあってそこそこ移動能力はあるけれども、ピーターのそれは圧倒的だ。おそらく身体能力も僕以上。ウェブも相まって、緊急時の救助能力なら空を飛べるスタークさんよりも上かもしれない。屋上に上がってしっかりと踏ん張ったピーターが僕に向かってウェブを飛ばす。トラックの上で助走を付けて、飛び上がって――今！

空中でウェブを掴み、ターザン式で振り子のように２階の窓に接近する。窓越しに見える階段前の見張りに向かって思いっきり片手で盾を投げた。ガラスが割れるのに続けて体を丸めて中に転がり込む。

転がって勢いを殺しつつ直様立ち上がる。窓ガラスをぶち抜いて盾を当てた１人は

ノックアウト。もう1人は――殺気！サマーソルトキックのように飛び上がった直後に響く銃声。危なかった！

「チッ、クソ野郎がっ!!」

口汚い言葉と共に、硬いものを踏む感触。蹴りは外れたけれど、どうやら銃は奪い取れたようだ。そのまま横に蹴り飛ばす。声のした方に向き直ると、迷彩服にタクティカルベストを着た、いかにも軍人です、というような格好の男がいた。苦々しげな顔で僕を睨んでいる。

「お前、最近噂になってるキャプテン・アメリカの真似事してるっていうイエローモンキーだろ？ガキは大人しく家でヒーローごっこで満足してりゃあいいものを。調子に乗るからこんなとこに来て死ぬことになる」

厭らしく嘲笑いながらナイフを抜く男。そのまま刃を舐めている。……そんなことする人本当にいるんだな。

ただ、言動は下品だけど、隙はない。かなりの腕だ。腕を上げてファイティングポーズを取る。

「……真似事でも、貴方よりは上だと思うよ。試してみるかい？」

軽く挑発すると、一瞬で顔が怒りに歪んだ。

「元コマンドー部隊のベネット様を舐めやがって！」

激昂しながらも、基本に忠実に半身でナイフを突き出してくる男。素早く突き出されるナイフを後退しつつ躱す、躱す、腕を払って捌く、また躱す。やはり強い。けれど――

「――シッ!!」

しびれを切らして放たれたローキックにこちらもローを合わせる。それなりに力を込めた蹴りに、相手は後退しつつたたらを踏んだ。続けざまにこちらから踏み込んで左のストレート。両腕でガードされたけど、相手の顔は歪んでいる。

キャプテン・アメリカことスティーブ・ロジャースの本気の攻撃は、一撃で体格に恵まれた成人男性を昏倒させる威力がある。全力の蹴りはまともに入れば鍛え上げられた軍人を地面と水平に吹き飛ばすほどだ。キャプテン・アメリカと同じ身体能力を持ち、陛下を始めとするワカンダの戦士や、超人兵士たるウィンター・ソルジャーに鍛え上げられた僕の攻撃は、真似事にすぎなくてもただ生身同士で打ち合うだけなら十分なアドバンテージなのだ。

とはいえ、不利を悟って人質に手を出そうとされても困る。……苦手なんだけど、ピーターの真似事で挑発してみるか。お互い円を描くようにジリジリと移動しながら声をかける。

「どうした？コマンドー部隊とやらは、ヒーローごっこしてる子どもにも勝てないのか

い？」
「なんだとぉ!?」
よし……もう少し。もう少しで。
「来なよ！武器なんて捨ててかかってこい！」
「野郎ぶっ殺してやらあぁぁぁ!!」
プツン、とキレた泣き笑いのような形相で突っ込んでくる。ただ――残念。足元不注意だ。タイミングを合わせて僕の足元にきていた盾を踏んで跳ね上げる。前に出した右腕に吸い付く盾。突然防がれる視界に混乱するベネット。チェックメイトだ。
「ふんっ!!」
盾ごとの体当たりでベネットを吹き飛ばす。盾を下ろすと、大の字で昏倒したベネットの姿。……ちょうどピーターの方も終わったらしい。任務完了だ。
「怪我をしている方はいらっしゃいませんか!?」
部屋の隅に固まっていた人質に向かって声を張り上げると、口々にありがとう、大丈夫だという声が聞こえる。どうやら怪我人や急病人は出なかったらしい。一安心だ。ただ――
――イエローキャップだ――
胸をなでおろしているときに聞こえた、聞こえてしまった小さな声。……どうやら僕

のヒーロー道は、世界をまたいでも困難に満ちているらしい。どうしたものかな。
　そんなことを考えていると、通信が入った。またピーターから呟きの誘いかな、と思ったらスタークさんだ。慌てて応答する。
「はい、デクです。どうしました？仕事なら先程――え？ヴィジョンさんが？」

「――っていう感じでこっちに来たんですよ」
　クインジェットの中でアイスを頬張りながらキャプテン、ナターシャさん、サムさんに事の経緯を説明し終えると、３人は皆同じような、そして苦笑いのような顔をしていた。
「まあ、人種や肌の色、国籍で人を見るやつってのはどこにでもいる。何年たってもな。お前は……あんまり気にしないでいいと思うぞ。ところで、お前何選んだんだ？」
　サムさんがお土産のアイスの袋をごそごそやりながら言う。ナターシャさんも気にするなって言ってくれた。サムさんは黒人だし、ナターシャさんも元々はロシアの人だ。２人とも、アメリカだとそれなりに苦労することがあったんだろうことは想像できる。
「スターククレイジーナッツです。美味しいですよ」

指名手配中であるキャプテンたちに対して、スタークさんは何もしていない、というわけじゃない。僕が双方を行き来することでお互いの近況はそれなりに把握しているし、もっと上の、政府や色々な機関への働きかけで、キャプテンたちに捜査が及ばないように尽力もしている。それでも今回、ヴィジョンさんの信号が途絶えた、という緊急事態になっても直接連絡を取らないのは……仕方のないことなんだろう。そう簡単に割り切れるようなことだったら、僕が死にかけたあの場所で、２人は決裂しなかったんだから。

「俺は……マイティ・ソー　チョコ＆ａｍｐ：サンダーにするか」

そこまで言って、サムさんが顔を近づけて小声で続ける。

「（おいおい、なんでハルクのイケイケアイスがあるんだよ、気まずいだろ!!）」

「（僕はそういう方面はさっぱりなんですから、無茶言わないでくださいよ!!）」

同じく小声で言い返す。ワカンダや僕からの各種支援があるといっても、指名手配中である以上生活は色々と厳しいものになる。だからこそ、毎回こうやって都会らしい、アメリカらしいお土産を持参するんだけど……どうやら今回はチョイスがまずかった、らしい。サムさんと２人してそーっとナターシャさんを見ると、無言でハルクのイケイケアイスを食べていた。さっと目を逸らす。

キャプテンは……予想通りというかなんというか、キャプテン・アメリカのクッキー

サンドを手にとっていた。キャプテンの盾の色をしたクッキーで、バニラアイスを挟んでるやつ。けれど、一口食べてからずっとそのままみたいだ。
「キャプテン？」
「……嫌な予感がするんだ」
心配して声をかけると、ポツリとそう呟いた。いつの間にか、サムさんとナターシャさんもキャプテンを見つめている。
「戦いの予感だ」

今にして思えば、これが始まりだったのかもしれない。真似事ではなく、僕が真にヒーローとして立たなければいけない、始まり。……戦いの、始まりだった。

雄英体育祭1

――雄英体育祭は、要するに『個性あり、なんでもありの体育祭』だ。ＴＶ放映もされていて、その人気は全国レベル。スポーツの祭典と呼ばれたかつてのオリンピックに匹敵するとか。そして生徒たちにとっても、プロヒーローたちに自分の存在をアピールする絶好の機会でもある。形式は学年別総当り。複数種目をヒーロー科だけでなくサポート科などの他の学科も同じ土俵で種目ごとに競い合う。

……あちらの世界のヒーローたちは、どう思うんだろう。恐れられたり、奇異の目で見られることがなくなったと喜ぶのか。それとも、見世物にされていると憤るのか。どっちもありそうだ。

「1――A　緑谷出久!!」

現実逃避をしていると、ついに僕の名前が呼ばれてしまった。ヒーロー科入試1位だから、ということで1年生の選手宣誓に選ばれてしまったのだ。こういうの苦手なんだ

けど、どうしよう。こんなとき、さっきまで想像してたあの人たちならなんて言うんだろうか。

『体育祭？それってオリンピックみたいなやつ？なんでもありなら僕の勝ちに決まってるだろう。時間の無駄だね。その時間をもっと有効活用しようじゃないか、親睦を深めるとかね。シャワルマって知ってる？近くに美味い店があるんだけど――』

……この人、何言っても揉めそうだなあ。

『体育の祭。つまり、筋肉の祭だ。そして、俺は筋肉だ。後はわかるな？』

わかりません。あと、途中から脳内で太らせてしまってごめんなさい。

キャプテンは……真面目に、無難なことを言って終わりそうだな。でも――

『真っ当な方法で!!しかし圧倒的な実力を示して魅せろ、緑谷少年!!世界に『君が来た!!』ってことをね!!　』

これは、僕が来た!!ってことを世間に示す戦いだ。選手宣誓なんて絶好の機会を無駄にするわけにはいかない。カツカツと階段を登りながら少し考えて――浮かんできたのは、結局キャプテンの顔だった。

「宣誓」

右手を上げる。瞳に決意を込めて、前を見据える。

「数年前、僕は負けました」

周囲がざわつく。何を言っているんだ?という戸惑いと、多くの負の感情。

「家族を失い、友人を失い、自分の一部を失った」

周りの景色が消えていく。あの時へ、戻っていく。

「取り戻せたものもある。けれど、そうでないものもあった。負けるということは、何か

を失うということ。だから――」

精神があの頃に戻っていくのを自覚する。僕は、所謂『サバイバーズ・ギルト』なんだろう。２００９年、トニー・スタークが自身がアイアンマンであると公表してから、超人の数は何かに導かれるかのように、指数関数的に増えていったという。それでも、人を、世界を、宇宙を救うにはヒーローの数はまだまだ少なかった。

そして、ヒーロー飽和社会と言われるこの世界。……戻ってからずっと、学校生活を謳歌している自分がもどかしかった。死柄木弔と出会って久しぶりに感じた濃密な死の気配に、いてもたってもいられなくなった。おかしいんだろう。異常なんだろう。それでも、この気持こそが僕があの世界にいたという証でもあるから。だから、今だけは。

「『必ず勝つ』」

あの時の自分の言葉を重ねよう。

第一種目は障害物競走。出場者の数に対してスタートゲートが明らかに狭い。つま

り、このスタート地点が既に最初の篩。なんだけど。僕の周りには微妙に奇妙な隙間ができていた。あんな選手宣誓をしてしまったせいなのか、生徒の大半が気味悪がって僕に近づきたがらなかったせいだ。――まあいい。僕は全力でやるだけだ。

3、2、1、……スタート！ゲートに付いたランプが切り替わると同時に全身の筋肉をフル稼働させて前に進む。とりあえず前に出ないとな、なんて考えていると、足元から冷気。いきなりだな轟君！

慌ててジャンプすると、予想通り足元が一斉に凍りついていた。周囲を確認すると、足首辺りまで凍らされた生徒が沢山いる。とはいえ、ざっと見る限りヒーロー科の生徒は殆どが回避しているようだった。

……あんまり悠長にしている暇はなさそうだな。

脚に力を込めてずんずんと進んでいく。加速仕切る前にと周囲の生徒が掴みかかってくるが、気にしない、気にならない。

――ラグビーやアメリカンフットボールの選手とふれ合った経験のある人ならわかるだろうか。どれだけ力を入れようと、数人がかりでも動かすことはできないし、逆に

片手で無造作に押されただけで吹き飛ばされてしまう。常人同士でさえ、筋力と体格の差は如何ともし難いのだ。ならば、超人兵士たる僕だとどうなるか。

『オイオイオイオイ!!初っ端から妨害ブチかました轟もすげぇが、緑谷なんだアレ!?背中に３人ひっさげたまま走ってやがるぞ!?』

特に鍛えてもいない、成長途中の子ども程度ならこうなるのだ。とはいえ、いつまでもこのままという訳にはいかない。意識がないまま僕にしがみついている生徒はそっと離させていただいた。前に見えたのは……かっちゃんだ。つまり先頭集団には入れたらしい。

入試で見たお邪魔ロボットが氷漬けで倒れている上をそれぞれの方法で飛んでいくかっちゃんや瀬呂君、常闇君を追いかける。多分轟君が飛び出していて、かっちゃんたちがそれをおいかけているんだろう。観客に見せやすくするためや、順位を明確にすることを考えてゴール前はなるべくシンプルなギミックにしているはずだ。それまでにできるだけ距離を詰める！

続いてのギミックはアクションゲームに出てきそうな飛び飛びの足場の間にロープが張り巡らされた綱渡り。足が止まる生徒たちを無視してかっちゃんと同時に突っ込んだ。なるべく間隔が狭い足場を選んでスピードを落とさずに直接飛び移り続けてい

く。ちょっと遠いところも、跳躍でなるべく距離を稼いであとはロープにぶら下がれば腕の力だけで移動できる。

「テメーには……テメーにだけは負けねぇぞ糞デク!!」

良い感じに汗をかいて調子が出てきたのか、掌から爆風を出しつつ空を飛んで移動するかっちゃんが、僕の頭上を通り過ぎざま叫んでいった。その姿が、今はもういないあの人と重なって。

「僕も負けないよ、かっちゃん!!」

なんだか、久しぶりに心から笑えた気がした。

谷を越えて少し進むと――なんだ？見る限り平坦な道なのに、轟くんが進みあぐねている？

『地雷の位置はよく見りゃわかる仕様になってんぞ!!目と脚酷使しろ!!』

地雷?いくら雄英高校とはいえ体育祭で地雷はまずくないか!?

『ちなみに地雷!威力は大したことねえが音と見た目は派手だから失禁必至だぜ!』

相澤先生の『人によるだろ』という言葉と同時に、轟君のすぐ後ろを走っていた誰かが派手に吹き飛ばされていた。ただ、落下による衝撃はあっても爆発自体で怪我はしていないらしい。それでも地雷はどうかと思うけど。

「どけぇ!デク!」

かっちゃんは相変わらず空中を飛んで地雷を無視していく。このままだと１位争いは轟君とかっちゃんに絞られるだろう。僕が取るべき行動は――

『おぉっとぉ!?無個性ながらここまで先頭集団に食い込んでいた緑谷がうずくまっち

まったぞ!!』

呼吸を整える。手をついて、前傾姿勢に。腰を上げて――　Ｇｏ！

『ってはあああぁぁぁっ!!??緑谷、まさかまさかの強行突破だ!!いや無理があるだろ……って爆風も轟音も無視してそのまま突き進んで行くぞ!!』

個性にも色々ある。身体能力が無個性となんらかわらない人だってざらにいるだろう。ならば、地雷の威力は『一般的なフィジカルの生徒が深刻な怪我をしない程度』まで抑えられているはずだ。それなら、僕なら無理やり突破できる!!

なるべく地雷を後ろに蹴り出すように走っていく。爆風を後ろに逃し、加速する。後続の妨害にもなる。まっすぐ最短距離を進んで――見えた！先頭を進む轟君と、その肩を掴むかっちゃんだ。２人とも振り返って驚きの表情をしているが、もう遅い。

「Ｏｎ　ｙｏｕｒ　ｌｅｆｔ　!!」

左側を失礼しつつそう声をかける。１度は言ってみたかったんだ。１位なんだし、

キャプテンもこれぐらいは許してくれる……よね？

『ゴオオォォォル!!選手宣誓の宣言通り!!１位は緑谷出久だぁ!!』

湧き上がる歓声に右手を挙げて応える。さあ――まだまだ、これからだ!!